

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成28(2016)年度 実施報告書

2017年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 28（2016）年度 実施報告書

2017 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター

はじめに

本報告書は「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成－女性の役割を見据えた知の国際連携－」事業とその他の資金による平成 28（2016）年度のグローバル協力センターの活動実績を取りまとめたものです。

平成 23（2011）年度に発足した「共に生きる」スタディグループは登録者数が 150 人を超え、メンバーに向けて学内外の平和構築や国際協力関係の情報を提供するとともに、自主的な活動に関する発信を支援いたしました。平成 25（2013）年度から正規科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として開講している国際調査（スタディツアー）は、カンボジアとネパールにおいて総合的に国際協力について学び、交流し、体験するプログラムとして更なる充実に努めてまいりました。大学間連携イベントとして実施した合宿・ワークショップ活動や大学院生による国際調査研究は、様々な側面から平和構築と国際協力について研究し、実践する人材育成の手法として、また他大学の学生との知的交流の機会としての役割を果たして参りました。公開セミナーでは、国際開発と平和構築に関心を寄せる学生、研究者、一般市民へ向けて情報発信を行い、グローバル化社会における大学の国際貢献の一端を担うことができたと自負いたしております。

本年度の活動報告書は、本実施報告書のほかに『『国際共生社会論実習』『国際共生社会論フィールド実習』スタディツアー実施報告書』、『大学間連携イベント『アフリカルチャージゲーム』実施報告書』、『大学間連携イベント『国際協力ボランティアを知ろう』実施報告書』『平和構築分野における国際調査報告書』『女子教育・基礎教育分野における国際調査報告書』の 4 冊を作成し、詳細な活動内容と成果を記録しました。合わせてご一読の上忌憚のないご意見を賜れば幸いです。

本事業の実施にご支援、ご協力を賜りました学内外の関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。今後も 7 年間の活動で得た平和構築のためのネットワークと人材育成にかかわる知見や成果を活用して更なる知の集積・発信と教育研究に取り組んでいきたいと存じます。引き続きのご協力をよろしくお願いいたします。

2017 年 3 月

国立大学法人お茶の水女子大学
グローバル協力センター長 浜野 隆

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成 28 (2016) 年度 実施報告書目次

はじめに

I. 事業の概要	1
II. 平成 28 (2016) 年度の活動	5
1. 活動の概要	7
2. 「共に生きる」スタディグループの活動	9
2. 1 学生自主活動	9
2. 2 微音祭 (学園祭) における展示・発表	14
3. 「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」	17
3. 1 実施概要	17
3. 2 参加学生アンケートに見る成果	22
3. 3 その他	27
4. 大学間連携イベント	28
4. 1 「アフリカルチャーゲーム」	28
4. 2 「国際協力ボランティアを知ろう」	33
5. 国際調査研究	39
5. 1 平和構築・人間の安全保障分野	39
5. 2 女子教育・基礎教育分野 (野々山基金事業)	39
5. 3 採択者、調査内容一覧	39
6. 国際協力機構 (JICA) 委託研修	43
6. 1 JICA 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」	43
6. 2 アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト (PEACE)	48
7. 野々山基金による活動	49
7. 1 アフガニスタン女性教員・学生の短期研修	49
7. 2 アフガニスタンへの絵本寄贈	52
7. 3 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン スタッフ来訪・セミナー	54
8. センター教員担当の全学共通科目	56
8. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ〔実習〕」	56
8. 2 全学共通科目「平和と共生実習」「『平和と共生』実践演習」	59
8. 3 学内公開講座	60

9. その他	67
9. 1 グローバル協力センター図書室利用状況	67
9. 2 情報発信	69

I．事業の概要

I. 事業の概要

【事業名】

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知的国際連携—」

【事業期間】

平成 22 (2010) 年度から平成 28 (2016) 年度

平成 22 (2010) 年度に文部科学省特別経費事業として 4 年計画で開始し、平成 23 (2011) 年度から大学一般経費事業に組み替え継続。

【概要】

グローバル社会における平和構築を目指して、先進国および開発途上国の大学等との国際的ネットワークを創成する。このネットワークは、女性の役割を見据えた知的国際連携であり、先進国と途上国の大学等が共同して、途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト地域における女性と子どもへの支援の調査・研究と支援活動を行うとともに、ネットワークに基づく教育（人材育成）の実践の場とする。

【事業実施主体】

国際本部グローバル協力センター

【目的・目標】

本事業は、現代のグローバル社会における最重要課題である開発途上国、特にアフガニスタンをはじめとするポスト・コンフリクト国・地域における女性と子どもへの支援を目指した、知的国際連携による教育・研究・社会貢献を目的とするものである。ポスト・コンフリクト国・地域を含む開発途上国では、女性は経済的・社会的弱者であり、中等・高等教育を受けることが非常に難しいのが現状である。

お茶の水女子大学は、大学の基本的な目標として「すべての女性とその年齢・国籍等にかかわらず、個々人の尊厳と権利を保障され、自由に自己の資質能力を開発し、知的欲求の促すままに自己自身の学びを深化させること」を掲げている（第 2 期中期目標・計画前文）。さらに、世界の女子大学の多くもまた、「自らの知見を世界の平和の為に使う」ことを建学の精神としている。本事業では、こうした世界の女子大学が持つ建学の理念を実現するために、女子大学が一つになって平和を築くための活動を行うことを目的とする。

本事業の取り組みは、お茶の水女子大学が拠点となり、日本および世界の女子大学とネットワーク（フォーラム）を形成し、大学の構成員（教職員、学生・大学院生、卒業生の組織）

による大きなネットワークによって開発途上国の女性と子どもへの支援、紛争によって傷ついた女性と子どもへのサポートを行うものである。また、こうした活動は、大学の使命である教育・研究・社会貢献を活性化し、この分野の人材育成活動に資することが考えられている。

本事業を通じて、大学間国際連携に基づくグローバル社会における平和構築の知的ネットワークの形成と、これに基づく教育・研究活動システムの創成を目指す。

II. 平成 28（2016）年度の活動

II. 平成 28（2016）年度の活動

1. 活動の概要

本年度は、平成 23（2011）年度に設置された「共に生きる」スタディグループの活動の継続・拡大、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」の充実、大学院生による平和構築と人間の安全保障に関わる国際調査研究支援の拡充を図るとともに、平和構築と国際協力に関わるセミナー、大学間連携イベント等を開催し、教育と実践の融合に努めた。

実施状況

学内外の組織、専門家とのネットワークの構築と、それに基づく人材育成や情報発信として以下の活動を実施した。

- （1）国際協力人材の養成に関して、昨年度に引き続き「共に生きる」スタディグループを組織し、学内外で開催される国連機関、JICA、NGO、学術団体等のセミナー・講演会の情報を提供し、関連専門知識の蓄積と共有に貢献するとともに、グループの登録者を中心に平和構築と開発に関する展示・発表等様々な活動を実施した。
- （2）平成 23（2011）年度から実施し平成 25（2013）年度に全学共通科目「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」として正規科目に位置づけた国際調査（スタディツアー）をカンボジアとネパールで実施し、開発途上国の大学、政府機関、国際援助組織との連携・協力による実践的知識の提供による教育の充実を図った。
- （3）大学間連携事業として、青年海外協力隊訓練生・帰国した元ボランティアとの交流を主眼とする「国際協力ボランティアを知ろう」、サブサハラ・アフリカ地域の開発と農村の貧困問題を考えるシミュレーションゲームの「アフリカルチャーゲーム」を実施し、国際開発と協力に関心をもつ他大学女子学生との交流を深めた。
- （4）全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ〔実習〕」の履修を通じて、学生に NPO に関する指導を行うとともに、国内の NPO にインターンとして派遣し、公益を目的とする団体における実務経験の獲得を可能にした。
- （5）全学共通科目「平和と共生演習」において、開発援助や人道支援の現場における様々なステークホルダーの役割と協働の課題、フィールドワーカーが国際協力に携わる際に必要とされるコミュニケーションやマネジメントなどの実践的スキルについて理解を深めた。

開発途上国の女性と子どもに関する研究としては、学内外の研究者と協力して以下の活動を行った。

- (1) 中西部アフリカ地域の幼児教育専門家研修（通算第 11 回）を通じて得られた途上国の教育に関する情報を分析するとともに効果的な研修方法について研究を行った。
- (2) アフガニスタンの大学女性教員 1 人と研究者 1 人を招聘して生物学と化学分野の短期研修を実施し、その専門知識を増加させることでアフガニスタンにおける高等教育レベルでの女性支援を実施した。
- (3) 「アフガニスタン女性の現在と未来」について、アフガニスタンからの研修生とアフガニスタンの女性と子どもを支援する活動を実施している NGO の講師による懇談会を開催した。
- (4) アフガニスタンで図書館運動を継続するシャンティ国際ボランティア会と協力して、アフガニスタンの子どものためのオリジナル絵本（ダリ語、パシュトゥ語）を作成し、同会が支援する学校図書館に配布することで、アフガニスタンの識字教育・基礎教育を支援した。

2. 「共に生きる」スタディグループの活動

平成 23（2011）年度に発足した「共に生きる」スタディグループは、学部・学年にかかわらず平和構築と国際協力、国内のボランティア活動等に関心をもつ学生が加入し、自主的な活動への参加を呼びかけその成果を発信している。

平成 28（2016）年度は、4 月に 2 回の説明会を開催して新規メンバーの加入を呼びかけるとともに、途上国の教育支援、難民支援、東ティモールとの交流を実施している学生グループの活動紹介、及び「JICA 大学生国際協力フィールド・スタディ・プログラム」参加報告を行った。年間を通じて、学生有志による展示、不用品回収・物品販売、途上国支援の報告セミナーなどが実施され、学生による国際協力実践を推進するとともに、センター・ホームページを通じてグローバルな問題へのキャンパスでの実践について発信した。



STUDY FOR TWO による活動紹介



難民支援プロジェクト活動紹介

2. 1 学生自主活動

（1）図書館展示企画「SOGI～性別ってなんだろう～」実施報告

「あなたは人を好きになりますか？」「あなたの性別は何でしょうか？」

2016 年 10 月 31 日から 11 月 10 日までの約 2 週間と 11 月 12 日・13 日の微音祭（学園祭）で、学生有志グループとして大学附属図書館にて、「SOGI～性別ってなんだろう～」というパネル展示を行った。「SOGI」は Sexual Orientation（性的指向）と Gender Identity（性自認）の頭文字をとった、個人の性の在り方を表す言葉である。「LGBT」という言葉を聞いたことがある人もいると思う。これらはセクシュアル・マイノリティを指す言葉であるが、SOGI はすべての人に対して用いられる。

昨年度も、「セクシュアル・マイノリティって知っていますか？」というテーマで展示を行った。今回は、存在を知ってもらうだけではなく、マイノリティ／マジョリティに関係なく「性の在り方の多様性」について、一人一人が考えてもらえる工夫をした。

パネルでは、性的指向がどのような性別の人に向くのか、自分の性別は何だと思おうかという問いを投げかけた。恋愛感情や性的欲求を抱かない「A セクシュアル」や、二極化された

男／女の性自認を持たない「X ジェンダー」などのセクシュアリティの紹介も行った。

さらに、事前に 60 人の方から回答いただいたアンケートを用いて「個人の性の在り方は異なる」ことをメッセージとした。同じセクシュアリティの内部でも多様なセクシュアリティが存在している。たとえ同じ「性自認が女性」の人であっても、その振る舞い方や感覚は異なっている。同じ「男性を好きになる」でも、どのような関係を望むかはそれぞれである。

展示を見た人からは「自身のうちにある差別意識に気づけることが知性なのかも」、「少しでも理解してもらう機会があれば生きやすい社会になるのかなと感じた」などの感想が寄せられた。

さらに、11 月 7 日、16 日に館外企画として映画上映会を実施した。デンマーク人の性同一性障害の女性の人生を取り上げた「リリーのすべて」、女性同士の恋愛を描いた「キャロル」の 2 本を上映した。どちらも世界的に人気を集めた映画であり、2 日間で 25 人ほどの参加があった。

映画を見た人の感想としては、「見た目と心が一致しないことが、誰しにも違和感を与えてしまうことが変だと思う」、「人には性別がなければいけないのだろうか」といった声や、「LGBT に関する映画はあまり見たことがなく考えさせられた」という声も多くあった。

今回の企画が、「性の在り方」について考えるきっかけになれば幸いである。アンケートにご協力いただいた方々、展示場所を提供してくださった図書館の方々をはじめとした皆様に感謝申し上げたい。

(文教育学部 4 年 柳下 明莉、生津 千里、研究生 梶原 佐保)



11 月 12 日・13 日の微音祭での展示の様子

(2) OCHANAN 活動報告

「難民問題にアクションを起こす『何か』を一緒につくっていきませんか?」と呼びかけたのは 2016 年 6 月末。グローバル協力センターのご協力で学内に掲示したポスターを見て集った 7 人の学生で有志企画「OCHANAN」はスタートした。OCHANAN は「お茶大生(OCHA)が難民問題(NAN)にアクションを起こす」に由来する。

大学 1 年生、4 年生、院生という学年も専攻も異にする学生がグローバル協力センターに集まり、和気あいあいとした雰囲気の中、数回のミーティングで『何か』を形にしていって。私たちは、メンバー自身にとっての実行しやすさと協力してくれる全学生にとっての関わり

りやすさを重視し、身近なものと掛け合わせた取り組みを考えた。そこで実施に至ったのが、難民キャンプに服を届ける衣料品回収とシリアから逃れた避難民女性による「イブラ・ワ・ハイト」の刺繍小物の販売である。小物販売は同年 2 月に実施したグローバル文化学環有志による「シリア難民にあたたかさを」でも反響があり、お茶大では 2 度目の実施となった。

10 月下旬の 1 週間、昼休みに実施した販売コーナーおよび衣料品回収ボックスの前には行きかう多くの学生や教職員の方々が足を止めてくださった。中には一抱えもある紙袋に服を詰め、連日持参する学生の姿もあった。学内向けの開催に続き、より多くの方々に向け 11 月の微音祭でも一般の方々に知っていただく機会をいただいた。



図書館前にて「イブラ・ワ・ハイト」の刺繍小物の販売と衣料品回収の様子



微音祭にてポスター展示と「イブラ・ワ・ハイト」の刺繍小物の販売と衣料品回収の様子

アクセサリーの購入と、古着の提供。日常生活の延長にある身近な取り組みを通じ、少しでも多くの方々が難民問題に意識を向け、自分との関わりについて思いを巡らすきっかけとなれば幸いである。

今回 OCHANAN メンバーとして関わった学部 1 年生の学生は、活動前は「難民問題についての知識がなかった」が、刺繍小物の販売を通じて「中東（シリア）の情勢のなかで働く女性たちの存在を知り、支援の方法について考えさせられた」という。今後も、OCHANAN のみならず、私たちを取り巻く社会が抱える課題に対して小さなアクションの数々がお茶大の中に広がることを願っている。

OCHANAN 学生有志（内山、後藤、佐藤、佐橋、志田、中本）

（3）「私たちにできる国際協力ってなんだろう？」実施報告

12 月 2 日附属図書館のキャリアカフェにて、「私たちにできる国際協力ってなんだろう？～世界の貧困と私たちのつながりから考える～」というテーマのもと、ロールプレイングを交えた参加型のワークショップを実施した。

当日はアイスブレイクからはじまり、（途上国の）「農民」、「医師」、「小学校教師」、「政府関係者」、「先進国の ODA 担当者」の 5 役の立場から世界の貧困の問題を構造的に紐解き、最後に私たち一人ひとりに出来ることは何なのか、という課題に向き合った。

日本国内でも貧困や格差は大きな課題となっているが、今回取り上げたのは発展途上国での貧困である。いわゆる途上国の貧困ときくと、私たち一人ひとりにとってはあまりに大きく漠然としていて、自分からは遠く離れた場所の課題であるように思えてしまい、一人では解決することができないものだと考えてしまいがちかもしれない。しかし、その問題の背景や構造を見つめ直してみれば、そこから私たちとのつながりが必ず見えてくる。



ワークショップ「私たちに出来る国際協力って何だろう？」の様子

そして今回はそのつながりを解決の糸口として、私たち＝学生という立場で、等身大の自分たちにできることを模索した。国際的な援助機関や団体が行っているような支援やプロジェクトはできなくても、その解決のために個々人ができることはあるはずだ。発展途上国の政府システムの問題や医師や教師の就労環境、農民の収入の改善にダイレクトに関与することは難しくても、その個々の課題に働きかける方法は多く存在する。

今回のワークショップでは、まずは他の国の人々が抱えている課題を知り、自分自身にも関係があることとして捉え、そのことを周りに広めていくこと、そして、自分たちの口で広めることで共感力をもって多くの人を動かし、自分の周りから少しずつ世界を変えるアクションを起こすことが重要なのではないかという結論に至った。

今後は、このイベントで学びとったこと、「一人ひとりの力が世界を変えることができる」という確信を、一人ひとりの活動につなげていくことができたらと考えている。

(グローバル文化学環 2 年 花岡 瑞月)

(4) STUDY FOR TWO 2016 年度活動報告

STUDY FOR TWO (SFT) は、要らなくなった教科書を大学内で回収・販売し、その収益を途上国での教育支援のために寄付している団体である。途上国の子どもたちだけでなく日本の大学生にもメリットがある、というのが SFT の特色で、全国約 50 の大学に支部があり、私たちはそのお茶の水女子大学支部として活動している。2012 年に発足したお茶大支部は、今年で設立 5 年目を迎える。

学内では、今年度も「共に生きる」スタディグループの活動の一環として、教科書販売を春と秋に 1 回ずつ、また中古教科書の回収を夏と冬に 1 回ずつ行った。

春・秋の教科書販売は、毎年履修登録期間に合わせて約 2 週間実施している。今年度は販売数をさらに増加させるため、SNS (特に Twitter) での広報に力を入れたほか、最も教科書をよく使用する 1 年生に向けての情報発信を積極的に行った。また、販売活動をアピールするための看板作りや、教科書のジャンルを分かりやすく表記する等、販売方法の改善に

も取り組んだ。その結果、4月に155,860円、10月に136,452円、計292,312円を計上し、過去最高の売上を達成することができた。この売上のうち約8割の23万円を、途上国の子どもたちへの教育支援金として寄付させていただいた。また、夏・冬の回収活動でも多数の教科書寄付をいただき、目標回収冊数を達成することができた。

さらに今年度は、学外での活動に積極的に参加した。SFTでは、地域の大学が集まる勉強会や、全国から支部員が集まる全国合宿が定期的に行われている。こうした場にお茶大支部からもメンバーが参加し、支部の成長に向けて、たくさんの知識やノウハウを学んだ。そこで得られた力とつながりを活かし、今後もさらなる発展を遂げていきたいと思う。

来年度も、より多くの子どもたちを支援し、より多くの方に利用していただけるよう活動していくので、ぜひご協力いただきたい。

最後に、教科書を寄付してくださった方々、購入してくださった方々、そして私たちの活動を支えてくださった多くの皆様に、心より感謝申し上げたい。

(SFTお茶大支部代表 文教育学部2年 武田 愛)



教科書販売の様子



日本女子大学支部との合同勉強会の様子



夏の全国合宿の様子

2. 2 微音祭（学園祭）における展示・発表

2016年11月12日（土）と13日（日）に開催された微音祭（学園祭）において、「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」スタディツアー参加者による調査結果の発表を行った。また、OCHANANによる難民支援に関するポスター展示、及びSOGIに関するポスター展示など「共に生きる」スタディグループ有志による様々な活動を紹介した。

ネパールスタディツアー学生報告

私たちネパールグループは、「ネパールの震災後の復興支援」、「ネパールの教育」、「ネパールの経済格差と貧困問題」の3つのグループに分かれてフィールドワークの成果を発表した。

12日午前に行われた「ネパールの震災後の復興支援」グループの発表では、2015年にネパールで起きた大地震は人々を苦しめただけでなく国の経済にも強い影響を及ぼしたと紹介された。実際、現地で私たちが見たのは古いレンガを再利用して建てられた家と、決して居心地がいいとは言えない仮設住宅の中で我慢強く暮らしている村の人々であった。震災後支援を行ったユニセフとJICAの方々と交流



「震災後の復興支援」グループによる発表

し、私たちは今のネパールにとって重要なのは「より良い復興」だと気づいた。また、豊富な観光資源も地震によって破壊され、文化財の再建も宗教を大事にするネパール人にとって重要な意味がある。



「教育」グループによる発表

同日午後、「ネパールの教育」グループは、ネパールにおける教育の現状と課題について発表した。ネパールの教育制度と歴史を紹介した後、現在、ネパールで問題視されている公立と私立の学校間の格差や、高い中退率、言語をめぐる困難などについて分析した。今、ネパールのGDPの3割を占めている「海外送金」は、多くのネパール人が祖国を離れて出稼ぎを選んだ結果である。こうした状況から、ネパール

の学校では英語教育を重視する傾向がある。多民族多言語国家であるネパールにとっての教育の難しさは、国際支援を行っている人々の言葉からも強く感じられた。また、ネパール

においてジェンダーに関する先進的な取り組みが生まれた原因の一つも、出稼ぎによって欧米のジェンダー規範と頻繁に接触することにあるのではとの指摘もあった。

13 日午前、「ネパールの経済格差と貧困問題」グループは、ネパールにおける貧困と経済を主にインフラと開発援助の 2 つの面から説明した。水、電気、道路など、私たちがツアーで身を持って感じたのはやはりインフラの整備が国の発展にとって大事だということだ。毎日発生する電気不足による長時間の停電、信号の停止、飲用水獲得の不便さ、日常的な交通渋滞など、様々な問題がある。「持続可能性」こ



「経済格差と貧困問題」グループによる発表

そ、これらの状況を改善しようとするネパール政府と援助を行う国際機関にとって重要なポイントである。そのため、ネパール側は設備だけではなく、国民の意識の向上にも重点をおくべきと感じた。その一方で、支援者側もただ支援をするだけではなく、現地の人々と共同作業をして、ネパール人の自分の国に対する責任感を育つための「人づくり」にも力を入れなければならないと気づいた。

現地で働く方によれば、長年に渡る国際社会からの支援によって援助慣れしてしまい受け身の姿勢が時に見られるネパールにおいて、ネパール人自身が「想像力」を身につけ、自らの未来を描けるように協力してゆくことこそが、私たちがネパールへの支援を行う際に大事な課題だと思った。震災復興も教育も経済発展も、支援者側だけではなく、ネパール人自身の意識の変化が国の発展への道しるべとなる。授業としては、徽音祭での成果発表が最後のプログラムになるかもしれないが、私たちにとって「共に生きる」という課題について考える歩みはまだまだこれからだと思う。沢山の方にご来場いただき、数多くの質問をしていただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

(人間発達科学専攻 M1 黄 薇嘉)

カンボジアスタディツアー学生報告

2016 年 11 月 12 日 (土) ~13 日 (日) に開催されたお茶の水女子大学第 67 回徽音祭 (学園祭) において、8 月に行ったカンボジアスタディツアーの報告を行った。学術企画の 1 つとしてポスターやスライドを交えた発表を行い、お世話になった先生方や学外の方々、また、高校生以下の学生の方など、多くの人に自分たちの学習成果を見ていただく機会になると共に、一般の方々の視点も知ることができて、とても実りのある活動となった。

私達の班は、カンボジアの教育と職業支援をテーマに調査をした。現地では、JICA 事務所を訪れて、カンボジア政府と連携した教育支援の取り組みを伺ったり、実際にカンボジアの病院で勤務なさっている青年海外協力隊の隊員さんのお仕事を見学し、カンボジアの

方々の職業意識や質を高めるためには、彼らの固有の文化を理解した上で、長い目でみた協働が求められることを実感したりと、様々なアクターからの教育・職業支援のあり方について触れることができた。それと共に、ポルポト政権により優秀な教育者が大量に失われたことが、未だにカンボジアの教員の地位や質の低さ、国民の教育に対する意識に影響を与えていることを実感し、カンボジアならではの問題の存在も強く認識した。

実際に現地の大学生の方々と交流をする機会もあった。その中で強く感じたのが、学生達の教育や職業に対する意識の高さである。カンボジアでは大学の進学率は未だ2%と、裕福な家庭の子どもしか高等教育を受けることができない。しかし、その中で育った若者達は、教育を受けることに対してすごく意欲的で、私達が学ばされる部分も多くあった。また、カンボジアでは日本も支援している国家雇用機構では、高校生に対する取り組みもあった。現地のカンボジアでは外資系企業が多く進出し、首都には高層ビルが建ち並び、急速に発展している。そういった場において、高度な労働力の担い手となれる若者を育成する職業支援機能が、教育制度と並行して整えられつつあると感じた。

充実した研修を通して、表面的にしか知らなかったカンボジアについて深く学ぶことができた。また、大学一年生の夏にこのスタディツアーに参加したことは、これからの自分の学びたい分野や進みたい道について考えるにあたって、とてもいいヒントになったように思う。

(文教育学部人文科学科 1 年 嶋 千瑛美)



教育班による発表の様子



貧困・ジェンダー班による発表の様子



保健・医療班による発表の様子

3. 「国際共生社会論実習」・「国際共生社会論フィールド実習」

3. 1 実施概要

3. 1. 1 目的

専攻・学年を問わず開発途上国の社会・経済・政治にかかわる問題や国際協力に関心を有する学生（学部・大学院博士前期課程）が、開発途上国における研究・実践の実績を有する教員の指導の下で事前学習と現地調査（8日間）を実施し、その成果をレポートにまとめて学内で発表することにより、文献を通じた学習とは異なる密度の濃い学習を行う。平成 25 年度より 2 単位の正規科目として実施している。学内公募・選考を通じて参加した学生数はカンボジア 11 人、ネパール 11 人（もう 1 人が参加予定だったが、体調不良により出発当日キャンセルとなった）の合計 22 人であった。

3. 1. 2 事前学習

説明会実施後、各グループ全 8 回（一部合同）の事前学習を通じカンボジアとネパールの社会経済や参加者の関心分野について学習した。

学内公開講座等

① 6 月 3 日（金）履修説明会（合同）

② 6 月 6 日（月）健康管理講座（合同）

講師：本田保健管理センター長

●カンボジア・グループ

③ 6 月 14 日（火）「カンボジアの現状（政治・経済・社会）と JICA の協力の概要」

講師：国際協力機構（JICA）東南アジア・大洋州部 宮崎 清隆氏

④ 7 月 7 日（火）「開発途上国の母子保健が抱える課題とカンボジアとの JICA 協力」

講師：国際協力機構（JICA）人間開発部 山形 律子課長

⑤ 7 月 12 日（火）「AAR Japan のカンボジアでの支援活動」

講師：（特定非営利活動法人）難民を助ける会 東京事務局 大室 和也氏

⑥ 7 月 23 日（土）学内公開講座（ネパール⑦と合同）

「カンボジアにおける平和構築～紛争による負の影響からの脱却～」

講師：国際協力機構（JICA）国際協力専門員 小向 絵理氏

⑦ 8 月 3 日（水）グループワーク

⑧ 8 月 17 日（水）安全講習会（スリ、交通事故、薬と補助食の携行など）

ブノンペン大学女子学生との交流における日本紹介のプレゼン練習

●ネパール・グループ

③ 6 月 7 日（火）「ネパールの概要」

講師：元日本キリスト教海外医療協力会ネパール派遣医師 檜戸 健次郎氏

④ 6月23日（木）「ネパールにおける学校教育」

講師：お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科人間発達科学専攻博士後
期課程 バズラチャルヤ・ディヌ氏

⑤ 6月28日（火）「ネパールと震災復興支援について」

講師：国際協力機構（JICA）南アジア部南アジア第4課 竹内 卓朗課長

⑥ 7月15日（金）グループワーク

⑦ 7月23日（土）学内公開講座（カンボジア⑥と合同）

「『より良い復興』を目指す女性たち—大震災後のネパールにおけるジェンダー主流化の可視化—」講師：上智大学 田中 雅子氏

⑧ 9月15日（木）安全講習会（安全、健康面での留意点について説明、等）

3. 1. 3 現地実習 カンボジアスタディツアー

（1）現地調査期間：2016年8月21日から8月28日まで8日間

（2）参加学生 11人

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	8	1	0		9
2	1	0	1		2
3	0	0	0		0
4	0	0	0		0
博士前期課程	0	0	0	0	0

（3）引率者 小西淳文特任教授、子浦恵アカデミック・アシスタント

（4）プログラム概要

1970年代から長期にわたる内戦とポルポト派による市民の虐殺を経て1990年代以降平和構築と社会経済開発に取り組むカンボジアの歴史を理解し、急速な成長を遂げる都市部と貧困層の多い農村部の経済・保健医療水準の格差についてフィールドワークを通じて学んだ。

国家雇用機構（NEA）では、カンボジアの求人・求職状況が急増している現状を学んだ。また、プノンペン大学女子学生や、カンボジア人女性起業家、カンボジア在住の日本人女性起業家、女性シニアボランティアとの交流を通じて、グローバル人材としての女性のあり方を学んだ。JICAカンボジア事務所での講義に加え、日本が20年にわたり支援してきた母子保健センターでの専門家による講義、コンポンチュナン州の州立病院で活動する青年海

外協力隊員 2 人の活動視察等により、援助の現場で活躍する方々の生の声に触れ、多くの刺激を受けることができた。さらに、日本の NGO である「難民を助ける会」による障害者支援分野の活動や受益者宅の訪問を通じて、多様な国際協力プログラムの具体例について学習することができた。また、地雷対策センターやその研修所での活動を視察し、内戦の負の遺産を取り除く活動が現在まで続いていることを確認した。

(5) 調査日程

8 月 21 日	成田空港発→ホーチミンシティ着 (VN 301) ホーチミンシティ発→プノンペン着 (VN 920)
22 日	国家雇用機構 (NEA) 及び西村 SV 活動 視察 プノンペン大学の女子学生との交流 カンボジア人女性企業家インタビュー 在カンボジア日本人女性企業家インタビュー
23 日	カンボジア日本人材開発センター訪問、日本語授業に参加、学生との交流 JICA カンボジア事務所で事業説明。
24 日	国立母子保健センター拡張計画 視察 カンボジア地雷対策センター (CMAC) 視察 シニアボランティアとの交流
25 日	コンボンチュナン州へ移動 CMAC 研修センター 視察 コンボンチュナン州病院 (青年海外協力隊員の活動視察と意見交換)
26 日	AAR(難民を助ける会)/Wheelchair for Development (WCD) AAR,WCD 車いす工房説明と見学 AAR インクルーシブ教育プロジェクト説明 車いす受益者宅訪問 (3 人)
27 日	ツールスレン虐殺博物館 見学 プノンペン発→ホーチミンシティ着 (VN 3850) ホーチミンシティ発→
28 日	→成田空港着 (VN 300)



プノンペン大学との交流で日本を紹介する
学生たち



地雷対策研修センターで地雷探犬の訓練を見学

3. 1. 4 現地実習 ネパールスタディツアー

(1) 現地調査期間： 2015 年 9 月 20 日から 9 月 27 日まで 8 日間

(2) 参加学生 11 人

学年	文教育学部	理学部	生活科学部	大学院	計
1	3	0	1		4
2	5	0	0		5
3	0	0	0		0
4	0	0	0		0
博士前期課程	0	0	0	2	2

(3) 引率者：青木健太特任講師、駒田千晶アカデミック・アシスタント

(4) プログラム概要

国連によって後発開発途上国（LDC: Least Developed Country）として認定されている域内最貧国の一つであるネパールを訪問し、同国が抱える政治、経済、社会等における諸課題に関して各自が設定したテーマに基づくフィールド調査を行った。また、民族・言語・イデオロギーなどの面で多様性を持つネパール社会において、現地の人々がどのように融和を保ちながら暮らしているのかを間近に見ることで、グローバル社会における共生のあり方について学んだ。

今回のツアーでは、特に、首都カトマンズでも計画停電が恒常的に行われるなど深刻なエネルギー不足に直面していることから、ネパール政府が行う代替エネルギーの促進活動について理解するため事業サイトを訪問した。また、昨年 4 月に発生したネパール大地震後の復興支援活動の現状を知るため、国際協力機構（JICA）の協力を得て被災地を見学した。

この他、参加学生は、国連、日本大使館、JICA、ネパール政府機関、NGO、高等教育機関等の関係者から話を聞き、ネパールのみならず開発途上国が持つ諸課題と各アクターの対応について学ぶ機会を得た。

第一日目は、ネパール政府人口・環境省代替エネルギー促進センター（AEPC）からネパールのエネルギー事情等について説明を受け、現地で活動している邦人国連職員との交流の機会も持った。第二日目は、在ネパール日本大使館及びJICA ネパール事務所を訪れ、日本の対ネパール支援の概要について学んだ。第三日目は、JICA のアレンジで、震災による被害を受けた村を訪れ、被災者の現状や、仮設住宅の様子について見学した他、被害を受けたパロパカール母子保健病院を見学した。第四日目は、車で 2 時間半ほど行ったカブレ郡ピントリ村にある AEPC の小型水力発電事業、バイオガス事業、改良かまどを見学し、ネパールの人々の一般的な暮らしぶりを学んだ。第五日目はカトマンズ市内の歴史遺産の震災後の復旧の様子を見学し、第六日目には、NPO 法人サルタックが地元の小学校で行う読書活動の見学、並びに、トリブヴァン大学工学部の学生との交流会を行った。

（５）調査日程

9 月 20 日（火）	0:20 羽田発—4:50 バンコク着（TG661） 10:15 バンコク発—12:25 カトマンズ着（TG319） 15:00 ネパール政府人口・環境省代替エネルギー促進センター （AEPC: Alternative Energy Promotion Center）ブリーフィング 18:30 邦人国連職員との会食
9 月 21 日（水）	10:00～12:00：在ネパール日本国大使館訪問 14:00～17:00：JICA ネパール事務所訪問 ① JICA の対ネパール支援の概要説明 ② 青年海外協力隊員 3 人によるプレゼン・質疑応答 ③ 青年海外協力隊員との交流（グループ別）
9 月 22 日（木）	10:00 JICA による震災支援活動と母子保健病院の見学 14:30 ユニセフ・ネパール事務所訪問
9 月 23 日（金）	終日 カブレ郡（日帰り出張） AEPC 事業地視察（山間部の小型水力、バイオガス発電、改良かまど等）
9 月 24 日（土）	終日 市内視察・文化財復旧支援見学（パシュパティナート、パタン・ダルバール広場、フェアトレードショップ、スワヤンブナート寺院等）

9月25日（日）	9:30 NPO 法人サルタックが支援する小学校訪問とブリーフィング 11:30 カトマンズ・ダルバール広場の文化財復旧支援の見学 14:00 トリブヴァン大学学生との交流
9月26日（月）	13:30 カトマンズ発ー18:15 バンコク着（TG320） 22:45 バンコク発（TG682）
9月27日（火）	6:50 羽田着



山間部の小型水力発電事業の受益者とのインタビュー



トリブヴァン大学学生との交流会で日本についてプレゼンをする参加者（右）

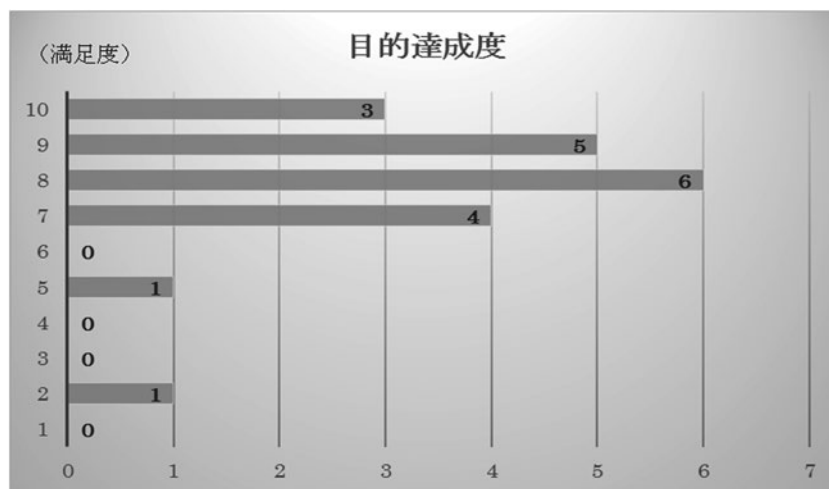
3. 1. 5 事後学習

帰国後は、グローバル協力センターホームページに報告記事を掲載するとともに、学内報告会を開催し（10月27日12:15～13:10、及び、10月28日9:00～10:30）、それぞれの学びを発表した。さらに、11月12日（土）及び13日（日）に開催された微音祭（学園祭）において外部からの訪問者に向けた発表を実施した。スタディツアーの訪問記録および参加学生の報告書は「『国際共生社会論実習』『国際共生社会論フィールド実習』スタディツアー実施報告書」として印刷・製本しホームページ上で公開した。

3. 2 参加学生アンケートに見る成果

スタディツアー実施前と終了後に参加学生20人に対して、参加満足度や参加経験を今後どのように活かしていくかに関するアンケートを行った。以下はその集計結果である。

Q.1 本スタディツアーで目的は達成できたか。

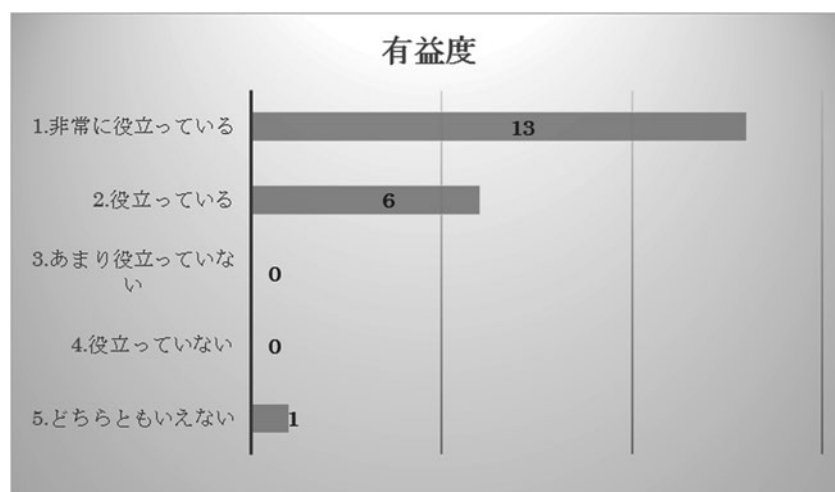


学生コメント

- 現地実習前にテーマとして持っていた疑問が、様々な人達の話、実際の現地の状況を判断して複合的に見ることで自分なりの考えが出たことに満足したから。
- プログラム内容は自分の目的・趣味にぴったりで充実したものであったが、語学力不足によって、聞きたいことを聞く勇気がでないなど、歯がゆい場面も多かったから。
- 専門分野とは異なる分野ではあるが、国際関係に興味があり、発展途上国に初めて訪れたが、今までの自分の認識とは全く異なる事実を学べ、大変実りある学習が出来たから。
- 関心のある分野、今まであまり注目してこなかった分野、どちらにおいても知識を深めることが出来た点では満足しているから。また、途上国の実情を知る経験が沢山できたと感じているから。英語での発信や、質問等が積極的に出来なかったこともあったので満足だとは思っていない。
- 様々な方のお話を聞き、自分の将来を見つめ直すきっかけとなったが、選択の幅が広がりより迷ってしまう結果になったから。
- カンボジアで活躍している日本人の取り組みやそれぞれの思いを間近で見ることが出来、現地で国際協力をするということについて深く考えることができたから。カンボジアの文化や国民性、日常生活も肌で感じる事が出来たから。もう少し現地の一般家庭や貧困層の実態に触れてみたかった。
- 普段の旅行ではなかなか訪れることのできない施設を訪問するなどして多様な経験をする事が出来たから。
- カンボジアの教育や生活を知ることが主な目的であり、大方知ることが出来たように思えたから。

- 貧困問題に興味がありプログラムに参加したが、現地へ行くことで、新たな見方が出来るようになった。また、貧困以外の問題やテーマにも新たに興味を抱くきっかけになったから。
- 観光では行くことのできないような所を訪問し、現地で活躍している方々の話を聞いた。社会問題について、自分の将来についても考えることができ勉強になったから。
- 本来目的としていた内容とは違う内容を多く学ぶことができたから。
- ネパールで現地の生活を 7 日間送ることで、はじめは日本の文化と異なる点ばかり目についたが、共通点も感じられるほど十分な期間滞在できたと感じるから。調査内容に関しても、国連や大使館、JICA やネパール政府など方々の話を聞くことによって様々な視点から多面的に見えるようになったから。
- 事前に設定した課題について、現地で十分に調査することが出来たから。
- テーマとした産業の分野について実際に触れることができ、またそれに関連する分野についても興味をもって話を聞いたから。
- 専門の学びへのモチベーションやネパールの社会、文化への理解を高まった一方、もう少し積極的に参加すべきだったという反省点もあるため。
- 1 週間という短い期間ではあったが、1 日 1 日が内容の濃い、とても充実したものであったと感じたため。現段階でプログラムが終了したわけではないため。今後、報告書作成や発表も含めて満足 of いくものにしていきたいと考えるから。
- 目的は十分達成できたと思うが、友人らの協力がなければ達成できなかったと思うため。
- 真面目に、積極的に活動に取り組むことができたため。特に疑問に思ったことについて積極的に質問することができたため、実習に参加した意義があると感じた。
- 幅広く、包括的にテーマ視点から現状を横断して捉えることが出来たため。

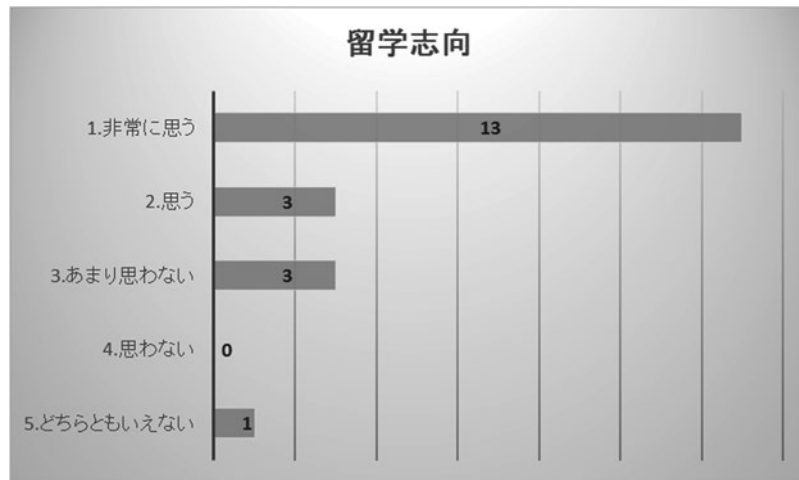
Q2. 本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか。



学生コメント

- 専門分野を極めて行く際に今回得た知識は重要であり、役立つと考えるから。
- 自分の興味のある分野で実際に活躍されている方々の経験やフィールドの様子を知ることが出来たから。
- 新しい国や文化に触れ、理解が深まったと共に知識も大幅に広がったから。
- 今後自分の専門分野を求めてゆくにあたりいい勉強になったと感じているから。
- 語学の学習へのモチベーションが上がり、また自分の将来について考え直すことが出来たから。
- 大学での専攻は心理学だが、興味のある国際開発や国際情勢についても今後も学び続けようとモチベーションが上がった。また、異文化交流の難しさとそのやりがいを知り、将来の選択肢の一つとしてインターナショナルな仕事も探してみようと思ったから。
- 多様な人の話を聞くことで将来の選択肢が増えたから。
- 今回のスタディツアーで特別に何かの職業につきたいと強く思ったわけではないが、後々影響はありそうだから。
- 現地での活動を視察するなかで、なぜその人達はそこで働くことにしたのかという、働くということについて考えるきっかけとなったことに加え、母子保健センターなどでは結婚、出産という女性にとって大きな問題について考える機会を得ることが出来たから。
- まだ就職活動はしていないが、今回の経験を役立てたいと思う。
- 今後国際協力の分野を学んでゆくにあたって、現地の現状を知っていることや、国際協力の分野に携わる方のお話を伺えたことを活かしてゆけるから。
- 途上国での調査は貴重な経験であるため。
- 大きな学習意欲を得られたから。
- 国際協力、開発支援への関心や理解が非常に高まったため。
- 自分の専門分野に焦点を当てつつ、別の角度から考えてみることでできる機会となったため。今後学習を進めて行く上でも視野を広げて考えることが期待できると思う。
- 多くの人と交流でき多様な考え方を知ることが出来たため。
- 共感的理解に近づくことが出来たと思うから。
- 今回の経験を契機に個人的な渡航を計画するようになったから。

Q3. 本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか。



学生コメント

- 違う文化、習慣に囲まれて、様々な刺激を受けるのは自分自身の成長につながると思うため、なるべく長期にわたる留学がしたいと考えたから。
- 語学力の不足を痛感する場面が多かったなので、その向上のためにも喋らなければいけない環境で過ごす経験をしてみたい。また、実際に現地に赴くことでしか分からないことも多いと気付いたから。
- 長期と短期では自分が感じる価値観が異なると思うから。
- 長く母国を離れれば、勉強だけでなく精神面も鍛えられるだろうと感じたし、何より語学力のレベルアップがかなり見込めると思うから。
- 異文化交流の楽しさを知ったことに加え、もっと語学力が高ければできることの幅が広がったかもしれないと悔やむ場面が何度かあったため、長期語学留学をしたいという思いが強まったため。
- もっと他の国の文化やその国に住む人の考え方や価値観について触れてみたいと思ったから。英語力を上げたいと思ったから。
- 今回の滞在期間が丁度良いと感じたから。
- 今回の滞在は期間が短かったためカルチャーショック等に悩まされることはなかったが、長期となると異文化の中でストレスやカルチャーショックを乗り越えて生活してゆく必要があるため、まだ不安を拭き切れていないから。
- 過去に3週間ほどの留学を経験しており、長期間に及ぶ留学に向いていないと思ったから。また、大学を4年で卒業する支障になるのは困るから。
- 英語を介して文化の異なる人と意見交換することの面白さと難しさを感じたため、長期留学によってその経験を長時間かけてしたいという思いが強くなったから。
- 国が異なれば、異なった考えの人とより多く触れ合えることができると思うから。

- 体力面で長期の留学は辛いと思うから。
- 以前から関心はあるものの、諸々の理由でまだ決めかねているため。
- その国のことを本当に理解するには「旅」という形ではなくて「住む」と言えるくらいの経験が必要だと感じたため。
- 異なる国や地域にも関心が高まったため。
- 1週間では現地の状況を理解したとは言えないから。
- ネパール（渡航先）国の課題や現状を知ることができ、より深く追求したいと考えるようになったから。

アンケート総括

「本スタディツアーで目的をどの程度達成できたか（10段階で評価）」という問いに対して、20人中18人が7以上の評価をしており、ほぼ全員が目的を達成したと感じていることが分かった。目的達成度評価が低かった学生については、「目的は達成できたが、友人らの協力がなければ達成できなかったと思うため。」とのコメントがあり、スタディツアーで目的は達成したものの、厳しく自己評価をした結果であることが分かる。ほとんどの学生にとって、初めての途上国訪問であった中、観光で訪れることの出来ない現場や様々なセクターの方との交流を通じて、知見の広がり、視座の変化、現地に赴くことの意義を挙げる声が多かった。「本スタディツアーによる経験が、学業、就職活動等に役立っているのか」という問いに対しては、「非常に役に立っている」（13人）、または役に立っている（6人）と19人（20人中）の学生が回答している。コメントとしては、国際協力関連への関心や理解が高まったことで今後の研究や進路を検討する上で参考になったことや、専門分野や語学学習への意欲が得られたという感想が挙げられた。「本スタディツアーを経て、より長期の留学をしたいと思うか」という問いに対しては、「非常に思う」（13人）、または「思う」（3人）と16人（20人中）が肯定的に答えている。3人の学生は「あまり思わない」、また1人の学生が「どちらともいえない」と答えている。コメントとしては、語学力を向上したいことや長期滞在をしてみたいという声がある一方、長期滞在による生活面での不安が要因としてあげられた。

3. 3 その他

実習実施にあたり、参加学生に対しては、今年度は本学からの支援に加えて、日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（短期派遣）による支援を活用した。

4. 大学間連携イベント

4. 1 「アフリカルチャーゲーム」

(1) 目的

アフリカルチャーゲームとは、参加者がサブサハラ・アフリカの小規模農民の役割を演じる中で、予期せず発生する天候不順、農作物価格の高騰・暴落、紛争の勃発、家族の誕生・病気・死亡など様々な出来事に見舞われながら、家族やコミュニティとともに生き延びることを通じて学習するシミュレーションゲームである。

ゲーム全体を通じて、アフリカの貧困問題だけではなく、コミュニティ内での自治と相互扶助の重要性、教育機会の不平等、家庭内の性別役割の違い、貧困家庭における栄養摂取の困難さ、農業で生計を立てる不安定さ、開発途上国における行政の脆弱性、開発援助の在り方などの幅広い分野について、学びを深めることを狙いとする。具体的には、世界の貧困問題についてアフリカ農村を事例として実体験すること、家計レベルで生産と再生産（出産、育児、健康、栄養、家事など）がどのようにかかわっているのか理解すること、家庭内のジェンダーによる役割分担を理解すること、貧困から脱却するためのアクションについて家庭、コミュニティ、政府、ドナー、NGO など多様な観点から考えることを目的とする。

(2) 開催日時・場所

2016 年 7 月 9 日（土） 8：30～17：30 本館 135 室

(3) 講師

アイ・シー・ネット株式会社 小林 花氏、野地 恵子氏、岡村 星香氏

(4) プログラム概要

当日は、4 大学から参加した 14 人がコミュニティ内の 8 家族に分かれ、各家庭の夫や妻の役割を演じて、サブサハラ・アフリカの小農民が抱える様々な問題について疑似体験した。8 家族の中には、寡婦や子どもや赤ちゃんの多い大家族など、様々な設定があり、4 年間にわたってシミュレーションゲームが行われた。毎年、雨季（前・後期）と収穫期（前・後期）が訪れるが、各家族は日々の家事や育児に加え、自然のサイクルに合わせて農作業をこなすほか、農閑期には町に出稼ぎに行くなど、多忙な日々が続く。家族内で人手が足りない時には、他の家族に子守りを依頼したり、農作業を手伝ってもらったりするなどの交渉ができる。

ゲーム全体を通じて、アフリカの貧困問題だけではなく、コミュニティ内での自治と相互扶助の重要性、教育機会の不平等、家庭内の性別役割の違い、貧困家庭における栄養摂取の困難さ、農業で生計を立てる不安定さ、開発途上国における行政の脆弱性、開発援助の在り方などの幅広い分野について、参加者は学びを深めているようであった。

時間	内 容	実施単位
08:30-08:45	グローバル協力センター挨拶 オリエンテーション	全体
08:45-09:10	参加者自己紹介	全体
09:10-09:30	ゲーム説明	全体
09:30-09:40	配役毎の説明	小グループ
09:40-09:50	休憩	
09:50-10:20	トライアルラウンド 1 年次 計画づくり	小グループ
10:20-11:20	トライアルラウンド 1 年次	小グループ
11:20-12:15	2 年次	小グループ
12:15-13:00	昼休み	
13:00-13:50	3 年次	小グループ
13:50-14:40	4 年次	小グループ
14:40-14:55	振り返りシート記入（個人作業）	個人
14:55-15:50	テーマについてグループで振り返り	小グループ
15:50-16:50	グループ発表	全体
16:50-17:30	ワークショップラップアップ、質疑応答、 アンケート	全体

（５）参加者

参加者数：14 人（内訳は以下のとおり）

内訳：お茶の水女子大学（9 人）、奈良女子大学（3 人）、宇都宮大学（1 人）、
上智大学（1 人）

（６）成果

出席者全員の報告書をまとめた報告書を印刷しセンターホームページで公開した。

（７）評価（参加者アンケート）

イベント終了後、参加学生を対象にイベント参加経緯と満足度等についてアンケートを配布し集計を行った。

「本イベントを知った経緯」としては、指導教員の紹介、ポスター・チラシの掲示物の方法で周知された参加者がほぼ全員で、メーリングリストで周知された参加者は 1 人であった。

「内容全般について」は14人中11人が満足、3人がやや満足であったが、計画を立てる時間が短かったことへのコメントがあった。

「テーマの選択」については12人が満足、2人がやや満足、「説明のわかり易さ」については7人が満足、7人がやや満足で、本イベントを通じて今後の学びにつなげてゆきたいとのコメントも寄せられている。

記述部分としては、「皆、最初は同じ金額をもらってゲームを始めたはずなのに、たった4年間で驚くほど格差が広がっていった」、「赤ちゃんが産まれて欲しくない、学校は行かasetたくても行かせられないなど、そんなことは言っても…と思っていましたが、生きるためにそう考えざるを得ないと思いました」、「思った以上に心理的にのめり込んだので、シミュレーションゲームの開発教育の手法としての効果を実感しました」、「他大学からの参加でしたので、様々な不安がありましたが、実際に参加してみて他大学からの方が約半数で安心しました」など、様々な分野についての理解を深める機会になったばかりではなく、所属する大学を越えたネットワークを作る機会になったと考えられる。

プログラムの広報について

本イベントを何で知りましたか（複数回答可）	計
ポスター／チラシ等の掲示	7
大学ホームページ、Facebook、Twitter、OchaMail	3
「共に生きる」スタディグループメーリングリスト	2
指導教員の紹介	8
その他	0

プログラムについて

実施の時期	計
満足／適当	12
やや満足／適当	1
普通	1
やや不満足／不適当	0
不満足／適当でない	0

時間配分と長さ	計
満足／適当	6
やや満足／適当	4

普通	3
やや不満足／不適當	1
不満足／適當でない	0

会場	計
満足／適當	11
やや満足／適當	2
普通	1
やや不満足／不適當	0
不満足／適當でない	0

テーマの選択	計
満足／適當	12
やや満足／適當	2
普通	0
やや不満足／不適當	0
不満足／適當でない	0

説明のわかり易さ	計
満足／適當	7
やや適當／適當	7
普通	0
やや不満足／不適當	0
不満足／適當でない	0

プログラムの内容全般について	計
満足／適當	11
やや満足／適當	3
普通	0
やや不満足／不適當	0
不満足／適當でない	0

その他（感想・提案）
自分が体験することでその状況を身近に感じられた。生死があったり、よりリアルにその状況を考えられたので問題を考えやすかった。男女の役割の違いや家庭格差、生きるだけでいっぱい、いっぱいというようなこともあったので生活の難しさ、健康の大切さが分かった。
長期間でコミュニティ内の連携をゴールとしたバージョンや紛争後の社会、民族対立や自然災害に対する脆弱国などのコンテキストを加えてみても面白そうだなと思いました。
アクティブ・ラーニング形式での授業は大学で何度も受けたことはありますが、とても本格的なキット、状況設定等でリアルに感じました。
アフリカ等、開発途上国の現状を知った上でゲームを行っていくと思っていたが、ゲームをして身を持って知っていくことが印象的であった。自らがゲームを通して問題点を知る機会であったため、個々人で感じ方が異なると思う。その共有ができ、自らが感じなかった新たな側面から意見やアプローチが分かりとても良かった。
思った以上に心理的にのめりこんだので、シミュレーションゲームの開発教育の手法としての効果を実感しました。これからの勉強に活かせる良い経験でした。次回はもっとゆったり時間をとりながらできたらいいと思いました。
まわりと意見交換をする中で自分では思い浮かばない考えをたくさん共有できたことが印象的だった。
今まで子どもに教育を受けさせるべきという考えしかなかったが、状況を考えることで、より現実的にどうすべきなのか考えないといけないと思った。
ゲームを通じアフリカの農村にいる人々の生活の大変さを知った。村はコミュニティであるのに、村人がどのように生活を豊かにしてゆくかについて一緒に考えることがなかったことが印象的だった。もし、皆が協力し合えば生き延びることだけではなく、豊かになれるのではと思った。コミュニティのつながりをつくることの大切さを感じた。



ゲームの様子。農作業、家事労働の配分や、家族の栄養計画等について相談



ゲームの様子。家族間で交渉をする参加者たち

4. 2 「国際協力ボランティアを知ろう」

(1) 目的

国際協力ボランティアについて、JICA 二本松訓練所において、帰国隊員、訓練生等との交流を通じて、派遣先での業務等を具体的に理解すること、並びに、原発事故のため、浪江町から二本松に避難し活動を行っている NPO 法人コーヒータ임을訪問し、精神障害者支援の実際と、原発事故による退避の影響について理解することを目的に実施した。

(2) 実施期間・場所

2017 年 2 月 16 日（木）～17 日（金）JICA 二本松青年海外協力隊訓練所

(3) 内容・プログラム

JICA 二本松訓練所では、訓練所職員、帰国隊員（保健師／インドネシア、理科教育／ガーナ）のプレゼンテーション・ディスカッション、訓練生とのディスカッションを通じて、JOCV の実際（派遣者のバックグラウンド、志望動機、職種、派遣中の業務・生活、途上国で学んだこと、帰国後の就職等）についての情報を得た。

また、原発事故のため、浪江町から二本松に避難し活動を行っている精神障害者を支援する NPO 法人コーヒータ임では、橋本理事長から、NPO 法人の活動内容、特に東日本大震災以降の活動の変遷や課題についてお話を伺うとともに、作業場を見学した。

(4) スケジュール

2 月 16 日	
7 : 30	お茶の水女子大学 発
12 : 00	二本松青年海外協力隊訓練所 着
13 : 30	二本松青年海外協力隊訓練所見学

14 : 00	講座「JICA 事業／JICA ボランティア事業概要」 講師：洲崎毅浩所長、永井涼所員、湯澤千里所員
14 : 40	青年海外協力隊 OB によるプレゼンテーションとディスカッション 年野明美氏（保健師／インドネシア） 中山直樹氏（青少年活動／ガーナ） 永井涼氏（訓練所職員）
19 : 10	訓練生とのディスカッション
2月17日	
6 : 30	訓練体験参加「朝の集い」
9 : 00	グループ・ミーティング、振り返りと学習成果発表
10 : 05	二本青年海外協力隊松訓練所 発
10 : 30	二本松市民交流センター 着 NPO 法人コーヒータイト橋本理事長講座と作業所・喫茶店の見学
13 : 00	市民交流センター 発
16 : 40	お茶の水女子大学 着

(5) 参加者

お茶の水女子大学 2人（2人は体調不良のため急遽欠席）

奈良女子大学 4人

グローバル協力センター教員 2人（原特任准教授、青木特任講師）

参加者内訳

学部 学年	お茶の水女子大学				奈良女子大学			
	文教	理学	生活	院	文学	生活環境	理学	院
1	0	0	0	0	1	1	1	0
2	2	1	0	0	0	0	0	0
3	0	0	0	0	0	0	0	0
4	0	0	0	0	1	0	0	0
留学生	0	0	0	1(2)	0	0	0	0
小計	0	1	0	1(2)	2	1	1	0
合計	2 (2)				4			

()は体調不良のため急遽欠席

なお、一部プログラムは同時期に訓練所を訪問していた麗澤大学と合同で行われた。

（６）成果

JICA 二本松訓練所の訪問を通じて、これまで理念的に考えていた「国際貢献」について、その一つの形態、きっかけとしての青年海外協力隊について、参加者が具体的なイメージを持つことができた。帰国隊員等の話からは特に、「途上国のニーズを踏まえた協力」の重要さとその理解に多くの労力を要すること、さらにそれをカウンターパートと共有することの難しさが理解できた。途上国の課題や社会について考えることが、日本の課題や社会について考えることにもつながるという理解につながったと思われる。

また、NPO 法人コーヒータイムの訪問を通して、精神障害者がどのような支援を必要としているか、また、一般の企業等への就職の難しさ、障害者支援をしつつ利益を上げることの難しさ（商品に人気が出て、増産するのが難しい）等が理解できたと考えられる。今回、参加学生には、震災復興に関心を持つものが多かったが、浪江町は退避の解除が予定されているが、解除されても町の復興は極めて難しいという現状が理解できたと考えられる。震災時、浪江町の人口は 2 万人であったが、退避解除後の帰町は 500～1,000 人と見込まれている。障害者についても、家族の状況などから、帰町する人は少ないとのことであった。

奈良女子大学の学生からは、同大学では国際協力関連の事業がほとんどなく、今後も大学関連イベントに参加していきたい旨、発言があった。

（７）イベント終了後参加学生アンケート集計結果

イベント終了後に、参加学生を対象に、イベント参加の経緯や満足度、関心分野についてアンケートを配布し集計を行った。

本イベントを知った経緯としては、ポスター等の掲示が最も多く、大学関連部署や教員などからの直接の誘い、メーリングリストでイベントを知ったことがわかる。本イベントに参加した動機としては、「国際協力に関心があるから」が最も高く、次いで、「東日本大震災関連の NPO のお話が聞きたいから」「福島県に行ってみたいから」が多く、国際協力ボランティアのみならず、東日本大震災にかかわるボランティアにも関心が高かったことが分かる。本イベントの満足度、開催時期・場所について、参加者全員が大変満足と満足度の高いものであったことがわかる。本イベントで役に立った内容としては、参加者全員が訓練生との交流は役に立ったと回答し、NPO 法人コーヒータイムの講義・見学も 5 人が役に立ったと回答している。講義や交流を通じ、現地、現場のニーズを理解して活動することの難しさや課題を具体的に理解することが出来たようだ。関心分野としては、国際協力全般が最も高く 5 人、東日本大震災からの復興・ボランティアが次いで 3 人、国際ボランティアが 2 人だった。その他として、インフラ整備が挙げられた。

本イベントをどのように知りましたか（複数回答可）	計
学内メーリングリスト	1
ポスター等の掲示	4
大学の HP	1
大学関連部署・センター・担当教員などからの直接の誘い	1
友人・サークル仲間等の誘いまたは SNS 情報	0
その他	0

本イベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）	計
国際協力に関心があるから。	5
国際協力に参加したいから。	3
JICA ボランティアに関心があるから。	2
東日本大震災関連 NPO のお話を聞きたいから。	4
JICA 二本松訓練所に行ってみたいから。	1
福島県に行ってみたいから。	4

本イベントの参加満足度は	計
大変満足	6
ほぼ満足	0
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントの開催場所・時期について教えてください	計
大変満足	6
ほぼ満足	0
あまり満足でない	0
改善してほしい	0

本イベントのどの部分が役に立ちましたか	計
JICA 講座「JICA 事業/JICA ボランティア事業概要」	1
JICA 講座「ボランティア経験者によるプレゼンテーションとディスカッション」	4
派遣前の訓練生との交流	6
グループ・ミーティング	1

NPO コーヒータイム講座・見学	5
その他	0

関心分野	計
国際協力全般	5
国際ボランティア	2
東日本大震災からの復興・ボランティア	3
開発途上国に関わること	1
その他	0



JICA 二本松洲崎所長による講座



青年海外協力隊 OV（年野明美氏）による講座



青年海外協力隊 OV（中山直樹氏）による講座



訓練生との夕食交流会



訓練生とのディスカッション



訓練体験参加「朝の集い」



NP0 法人コーヒータイム橋本理事長によるお話



NP0 法人コーヒータイム喫茶店

5. 国際調査研究

平成 23（2011）年度から実施している本学大学院生による国際調査への渡航費支援を公募し、国際協力人材の育成と調査研究の充実を図った。4 月 21 日に本プログラムに関して大学院生向けの説明会を開催し、約 10 人が参加した。同日から 5 月 27 日まで申請を受け付け、今年度は平和構築・人間の安全保障分野で 1 件、「アフガニスタンおよび途上国女子教育支援事業野々山基金」による女子教育・基礎教育分野で 1 件の合計 2 件を採択した。採択者から提出された調査報告書の詳細は、『『平和構築分野における国際調査報告書』『女子教育・基礎教育分野における国際調査報告書』』を参照。

5. 1 平和構築・人間の安全保障分野

（1）対象分野

- ・ポスト・コンフリクト地域の平和構築または開発途上国の人間の安全保障に資するテーマ・分野。
- ・女性、子どもの支援に関する分野、大学間の連携を促す目的の調査が望ましい。
- ・開発途上国のみならず、欧米諸国を拠点とする平和構築関連機関等の調査も可。

（2）対象者

博士前期課程および後期課程に在籍する学生（休学中の者を除く）。

5. 2 女子教育・基礎教育分野（野々山基金事業）

（1）対象分野

- ・開発途上国の女子教育および基礎教育、ノンフォーマル教育に資する国際調査。
- ・開発途上国のみならず、欧米諸国を拠点とする女子教育関連機関等の調査も可。

（2）対象者

博士前期課程および後期課程に在籍する学生（休学中の者を除く）。

5. 3 採択者、調査内容一覧

採択された調査は以下（次ページ）のとおりであった。

【平和構築分野】

氏名	所属	主な調査先	タイトル
佐々木奈摘	大学院人間文化創 成科学研究科ジェ ンダー社会科学専 攻 M2	ケソン（フィリピ ン）	フィリピンにおける女性 の労働と NGO—在宅労働 に焦点を当てて

【女子教育・基礎教育分野】

氏名	所属	主な調査先	タイトル
バズラチャ ルヤ ディヌ	大学院人間文化創 成科学研究科人間 発達科学専攻 D3	カトマンズ（ネパー ル）	中退リスクの規定要因— ネパール盆地の公立学校 を中心に—

※調査概要については次ページ参照。

フィリピンにおける女性の労働と NGO—在宅労働に焦点を当てて

Women's work and NGO in the Philippines: the case of home-based work

大学院人間文化創成科学研究科

ジェンダー社会科学専攻 M2 佐々木 奈摘

(要約)

フィリピンでは、貧困が根強い問題として残されているのに加え、それを反映してインフォーマル・セクターの増大が顕著である。インフォーマル・セクターの中でもとりわけ在宅労働 (home-based work) を行うのは大多数が女性であるが、それは家庭での役割との両立が可能であるという点で女性たちにとって利点がある一方、在宅労働という選択は女性たちの選択肢の不足によるものであり、その収入は低く、自宅内やその周辺で行われる仕事であるという性質上社会的に認識されにくいなどの問題が存在する。

本調査では、在宅労働を行う女性を対象にインタビューを実施し、その生活および就労の現状を把握した。また、在宅労働者を中心にインフォーマル労働者の支援を行う現地 NGO である PATAMABA¹ が在宅労働を行う女性たちに対してどのような支援を実施し、それによって女性たちの就労状況や生活がいかに変化したかを検討した。

結果として、調査対象とした在宅労働を行う女性のほとんどが低学歴であるものの、正規の職に就いた経験のある者が少なくなかった。しかしその正規の職は結婚・妊娠までの短期的なものであり、結婚・妊娠を機に在宅労働にシフトしていた。そのような学歴が低く周囲と協同して仕事を行う経験の少なかった女性たちにとって、学習やトレーニングの機会を提供する PATAMABA の貢献は大きなものであった。学習面での貢献だけでなく、PATAMABA は在宅労働という限られた範囲での労働を行ってきた女性たちに外出の機会の増大や交流範囲の拡大、交際の円滑化をもたらしており、それが女性たちの生活を快適なものにしていたことが分かった。PATAMABA の会員となることは、単に学習の機会が得られるという以上に在宅労働を行う女性たちにとって影響のあるものであった。

¹ 1991 年に草の根の組織として女性在宅労働者によって設立された NGO。12 地域、34 州にわたって在宅労働者をはじめとしたインフォーマル労働者を支援している。会員制の組織であり、会員は月に 10 ペソの会費を支払い、PATAMABA からの支援を得たり PATAMABA の有する地方自治体とのネットワークを利用したりすることができる。会員の 98% を女性が占める。

中退リスクの規定要因—ネパール盆地の公立学校を中心に—

Determinants Factors of High Dropout Risk in Nepal

—With Focus on Public Schools in Valley Region—

大学院人間文化創成科学研究科

人間発達科学専攻 D3 バズラチャルヤ ディヌ

(要約)

ネパールの基礎教育においては、小学校に就学していても様々な理由により中退に至る児童が数多く存在している。また、早期に中退した子どもは非識字者となることが多いため、個人のみならず、社会・国家にもマイナスの影響を及ぼしている。本調査研究の目的は、1) 中退リスクのある児童の特性を明らかにすること、2) 学校や教員のどのような要因が児童に中退したい気持ちを起こさせているか、あるいは早期中退を余儀なくさせているのかを検討すること、である。また、3) 友人（学校内外）のどのような要因が児童の中退に影響しているか、についても明らかにする。本調査の対象地としては、ネパールの盆地と言われる3つの地区（カトマンズ、パタンとバクタプール）の公立学校を選択した。また、調査対象は、公立小学校の4年生と5年生にした。調査期間は2016年7月7日から2016年9月5日である。

本調査結果として、「中退したいと考えている児童」は、本調査対象者1,041人のうち、約12%を占めていることが明らかになり、学校生活に不満をもつ児童も約6%存在することが明らかになった。また、教員とコミュニケーションが取れない、緊張する、体罰を与えるから怖い、一方的に教えるというような要因も見られたため、これらの要因が児童の中退リスクに結びついている可能性が示唆される。また、学校内外の友人関係も中退リスクに関係していることが明らかになった。

つまり、本調査からは学校、教員と学内の友人との関係、学外の友人との関係いずれもが、結果的に中退リスクを高めていることが示唆される。

6. 国際協力機構（JICA）委託研修

6. 1 JICA 地域別研修「中西部アフリカ幼児教育」

お茶の水女子大学は、独立行政法人国際協力機構（JICA）の委託を受け、中西部アフリカのベナン、ニジェール、ブルキナファソ、コートジボワール、チャド、カメルーンから 11 人の研修員を受け入れ、2016 年 9 月 26 日から 10 月 21 日まで幼児教育に関する研修を実施した。11 人の研修員はいずれも各国の幼児支援分野における行政官や視学官、指導主事など、指導的な立場の方で、平成 18（2006）年度の開始以来 11 年目の実施である。

サハラ以南アフリカにおいては、5 歳未満児の死亡率や栄養失調・疾患率が非常に高く、早急に解決すべき問題となっている。国際社会においても、近年では、乳幼児期からの保護と教育を一体化させた総合的アプローチの重要性が認識され、幼児教育分野での途上国に対する支援体制が強化されてきた。しかし、サハラ以南アフリカでは、乳幼児の保護や教育に関する専門的人材は不足しているのが現状である。

そこでこの研修では、アフリカ地域の人材育成に資するべく、日本の幼児教育や保育、幼児に対する支援について、その制度・政策、保育内容・保育方法、人材育成、評価などに関して、講義や視察、ワークショップを実施した。これらを通じて幼児支援に関する研修員の知識や技能を向上させることを目標にした。研修後のアンケートでは、研修で掲げた 6 つの単元目標（①所属組織での問題点の発見・整理、②ECD[Early Childhood Development]の概念・内容・動向、③幼児教育における格差問題とその是正策、④子どもの発達に応じた適切な保育内容・保育方法・教材作成、⑤教員養成・研修のシステム、⑥幼児教育における評価）についていずれも高い達成度が示され、満足度も高かった（図 1）。

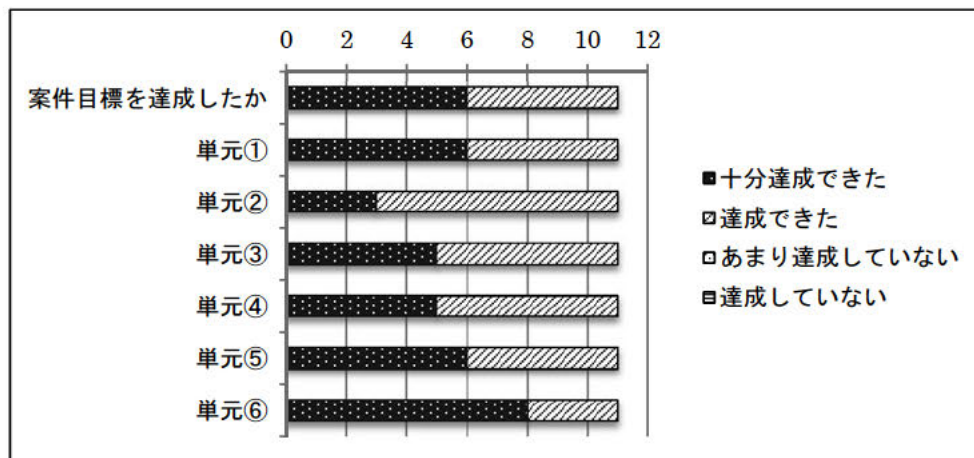


図 1 研修成果の達成度

特に評価が高かった単元⑤では、今年度は教員（保育者）の養成と研修に関する講義をより充実させた。加えて、単元目標に関係する講義と視察による包括的な知識伝達により、評価において高い達成度が示され、研修員の理解の深まりが確認された。また、同様に評価が高かった単元⑥については、昨年の「幼児教育における評価：子どもの QOL」に加え「幼児教育における評価指標と効果測定方法」の講義を実施した。評価システムが未整備の国が多いなか、保育環境や保育内容の評価について研修員の関心が高く、視学官が多いことから教員（保育者）の評価手法の詳細についても強い関心が示された。

研修最終日には、各研修員から帰国後の行動計画（アクションプラン）が発表された。研修員は帰国後、この行動計画に基づき、日本での研修の成果を自国で活用していくことになる。



講義中熱心に質問する研修員たち



ワークショップで紙コップを使って手作りおもちゃを製作する研修員たち

研修日程（2016 年）

日付	曜日	時間	内容	場所	講師
9 月 26 日	月曜日	12:30-13:20	開講式	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	
		13:30-14:20	プログラムオリエンテーション	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆（お茶の水女子大学）
		14:30-16:00	日本の幼児教育概要（講義）	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆（お茶の水女子大学）
9 月 27 日	火曜日	10:00-11:00	ようこそ東京おもちゃ美術館へ。 NPO が取り組む被災地支援、病児の遊び支援成り立ち、など	東京おもちゃ美術館	馬場清（東京おもちゃ美術館）
		11:00-12:00	ボード・ゲーム体験	東京おもちゃ美術館	田向優（東京おもちゃ美術館）
		13:00-14:30	おもちゃと遊びのワークショップ	東京おもちゃ美術館	岡田哲也（東京おもちゃ美術館）
		14:45-15:45	日本の遊び体験	東京おもちゃ美術館	鈴木里枝（東京おもちゃ美術館）
9 月 28 日	水曜日	9:00-12:00	日本の幼児教育（視察）	東京学芸大学附属幼稚園	岩立京子・山田有希子（東京学芸大学附属幼稚園）
		13:00-18:00	インセプションレポート発表準備	JICA 東京（SR409）	
9 月 29 日	木曜日	9:30-12:30	子ども中心の保育・幼児教育（講義）	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	内田伸子（十文字学園女子大学）
		13:00-18:00	インセプションレポート発表準備	JICA 東京（SR407）	
9 月 30 日	金曜日	10:00-17:00	インセプションレポート発表	JICA 東京（SR304）	浜野隆・子浦恵（お茶の水女子大学）
10 月 1 日	土曜日		休日		
10 月 2 日	日曜日		浜松へ移動		
10 月 3 日	月曜日	9:30-10:00	聖隷クリストファー大学訪問（挨拶）	聖隷クリストファー大学	小島操子（聖隷クリストファー大学）
		10:00-11:00	オリエンテーション	聖隷クリストファー大学	坪川紅美（幼児教育ネットワーク）
		11:00-12:00	学内施設見学（視察）	聖隷クリストファー大学	
		13:30-15:00	教育委員会の仕事（講義）	聖隷クリストファー大学	内崎哲郎
		15:00-16:00	ワークショップ1「保育の受入れ」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美（幼児教育ネットワーク）
10 月 4 日	火曜日	8:10-10:30	幼稚園見学	浜松市立犬居幼稚園	太田充代（浜松市立犬居幼稚園）
		11:00-11:45	小学校見学	下阿多古小学校	山下直行（浜松市立下阿多古小学校）

		13:30-16:30	学生交流	聖隷クリストファー大学	太田雅子（聖隷クリストファー大学）
10月5日	水曜日	9:30-11:00	保育園見学（障害児保育の見学を含む）	ながかみ保育園	野村弘子（ながかみ保育園）
		11:30-12:30	無認可保育園見学（認証保育園の実際）	家庭保育所マミー	鈴木美千代（家庭保育所マミー）
		14:00-16:00	ワークショップ2「求められる保育者の資質-受け入れを通して」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美（幼児教育ネットワーク）
10月6日	木曜日	8:10-11:30	こども園見学（子ども中心保育の実際）	聖隷クリストファーこども園	太田雅子（聖隷クリストファー大学）
		13:30-15:00	ワークショップ3「質の高い幼児教育とは」	聖隷クリストファー大学	坪川紅美（幼児教育ネットワーク）
10月7日	金曜日	13:30-17:00	ECDの概念と国際動向（講義）	JICA 東京（SR410）	三輪千明（広島大学）
10月8日	土曜日		休日		
10月9日	日曜日	10:00-17:00	遊びを通して学ぶ（ワークショップ・講義）	JICA 東京（SR406）	坪川紅美（幼児教育ネットワーク）
10月10日	月曜日		休日		
10月11日	火曜日	9:30-11:30	「人・遊び・地球・家庭・地域」の5つの「つながり」を大切にした保育（視察）	文京区立お茶の水女子大学こども園	宮里暁美（文京区立お茶の水女子大学こども園）
		13:00-16:30	幼児教育から初等教育への接続、幼児教育における評価指標と効果測定方法、「子どもの主体性を重視した保育」の長期効果（講義）	お茶の水女子大学第五会議室	浜野隆（お茶の水女子大学）
10月12日	水曜日	10:00-12:00	幼児教育と初等教育の連携（視察）	お茶の水女子大学附属小学校	池田全之・神戸佳子（お茶の水女子大学附属小学校）
		13:30-16:30	子どもの言葉を育む保育—その計画と実践（講義）	お茶の水女子大学第五会議室	小山祥子（駒沢女子短期大学）
10月13日	木曜日	10:00-12:30	日本の幼稚園と保育所（視察）	同仁美登里幼稚園	関本泰子（同仁美登里幼稚園）
		13:30-16:00	幼児教育における評価：子どものQOL（講義）	お茶の水女子大学第五会議室	松本聡子（お茶の水女子大学）
10月14日	金曜日	9:30-12:30	日本の幼児教育の理念と方法（視察）	お茶の水女子大学附属幼稚園	藤崎宏子・伊集院理子（お茶の水女子大学附属幼稚園）
		13:30-16:30	幼児教育のカリキュラムと保育計画の策定、教員養成（講義）および、振り返りのディスカッション	お茶の水女子大学本館第一会議室	浜野隆（お茶の水女子大学）
10月15日	土曜日		休日		
10月16日	日曜日		休日		

10月17日	月曜日	11:00-12:30	子どもの健康と学校保健、障害児の保育（講義）および、振り返りのディスカッション	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	浜野隆（お茶の水女子大学）
		13:30-16:30	幼児教育の財政（講義）	お茶の水女子大学文教育学部第一会議室	小川啓一（神戸大学）
10月18日	火曜日		インテリムレポート作成	JICA 東京(407)	
10月19日	水曜日	10:00-11:00	東京おもちゃ美術館内見学	東京おもちゃ美術館	橋坂智子（東京おもちゃ美術館）
		11:00-12:00	手作りおもちゃワークショップ（身近な素材を使って）	東京おもちゃ美術館	佐野佐和子（東京おもちゃ美術館）
		13:15-15:15	わらべうたワークショップ	東京おもちゃ美術館	田村洋子（日本わらべうた協会）
		15:15-15:45	質疑応答	東京おもちゃ美術館	橋坂智子（東京おもちゃ美術館）
10月20日	木曜日	10:00-17:30	インテリムレポート発表	お茶の水女子大学第五会議室	浜野隆・子浦恵（お茶の水女子大学）
10月21日	金曜日	9:00-11:00	まとめ、テキスト共有、評価会、ファイナルレポートに向けて	JICA 東京(SR407)	浜野隆・子浦恵（お茶の水女子大学）
		11:00-12:00	閉講式	JICA 東京(SR407)	

6. 2 アフガニスタン国未来への架け橋・中核人材プロジェクト（PEACE）

JICA は、アフガニスタン国の持続的開発を支える中核人材の育成を目標として、2011 年より 2019 年の間、アフガニスタンの行政官及び大学教員を日本国内の大学院修士課程等へ受け入れる、「未来への架け橋・中核人材プロジェクト（PEACE）」を実施している。

、帰国後は教員としてカブール大学で後進の育成・指導にあたる。特別プログラムの活動により、アフガニスタンの高等教育機関において次世代の人材を育てる指導者及び研究者としての必要な知識と技術を習得した。これまでに PEACE プロジェクトで来日した研修員のうち女性研修員はわずか 5%にとどまっている。アフガニスタン国の復興に向けたナジファさんの今後の活躍は特に期待される。グローバル協力センターでは、JICA との業務委託契約に係る事務処理を行いサポートした。

（注）既存の大学授業や研究室での指導に加えて特定の目的達成や開発ニーズを踏まえた特別の活動を行うことにより更なる効果の向上を目指して実施される付加的プログラム。

7. 野々山基金による活動

2012年1月に設立された、本学卒業生の故野々山恵美子様からご遺贈を受けた資金によって設立された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の事業の一環として、同年に開始したアフガニスタンからの女性研修員の受け入れを本年度も引き続き実施し、女子教育分野において国際貢献を行う活動を推進した。

7. 1 アフガニスタン女性教員・学生の短期研修

(1) 趣旨

5年目にあたる平成28(2016)年度は、アフガニスタン 大学女性教員1人(国費留学生として奈良女子大学で博士号を取得)、及び、卒業生1人を招聘し、森義仁教授(基幹研究院自然科学系・理学部化学科教授)および由良敬教授(基幹研究院自然科学系・理学部生物学科教授)の下で専門分野の知識・教授法に関する短期研修を行った。

(2) 研修員

1) 大学数学部講師

日本留学期間

奈良女子大学理学部国費留学生(数学博士)

2) 大学薬学部卒業生(現薬剤師)

(3) 研修期間・スケジュール

2017年1月15日～1月28日まで(日本滞在は1月16日～27日まで)

月日	内容
1月15日(日)	カブール発ードバイ経由
1月16日(月)	17:20 成田着 21:00 大塚宿舎着
1月17日(火)	11:00 研修説明(グローバル協力センター) 研修(森教授研究室)
1月18日(水)	教育の質保証システム説明(教育開発センター) 13:00～13:30 室伏学長表敬 研修(森教授研究室)
1月19日(木)	研修(講師:小川順子氏[第4代WiNGlobal会長・終身理事] 「原子力産業の女性と日本文化(総合芸術舞踊)」)
1月20日(金)	研修(由良教授研究室)

	15:00～16:30 懇談会（グローバル協力センター） 「アフガニスタン女性の現在と未来」
1月21日（土）	研修（講師：梅谷知子氏〔薬剤師〕『薬を買う』と日本文化）
1月23日（月）	研修（森教授研究室） 明治大学総合数理学部訪問
1月24日（火）	研修（森教授研究室）
1月25日（水）	研修（森教授研究室）
1月26日（木）	研修（森教授研究室）
1月27日（金）	11:00～12:00 評価会・閉講式（本館 103 室） 帰国準備 22:00 成田発（ドバイ経由）
1月28日（土）	カブール着

（４）研修内容

- ・”Diversity for Biology and Chemistry”（化学と生物学の社会における多様性）
（森先生、及び、由良先生〔共にグローバル協力センター員〕によるご指導）
- ・懇談会「アフガニスタン女性の現在と未来」における発表（1月20日 15:00～16:30）
学生・本学関係者が参加
- ・その他、研修期間中、学長表敬、教育開発センターとの意見交換、外部講師による授業、
明治大学総合数理学部訪問、評価会・閉講式などを実施

（５）成果

約２週間、研修生は、森先生と由良先生の指導の下、化学と生物学の社会における多様性に関する実験を交えた講義を受講した。今年度は、これら学内授業に加えて、他大学（明治大学）の総合数理学部における最新の取り組みについての説明を聴く機会や、外部講師による講義２コマ、また、研究生の１人が大学の教育質保証委員会メンバーということで教育開発センターの半田教授との意見交換の機会などを設けた。これらによって専門の理系分野に関する知識、並びに、教育研究の多面的な理解が向上し、帰国後、大学での教育研究に貢献することが期待される。

また、最終日に開催された評価会・閉講式には、駐日アフガニスタン大使館を含め学外から多数の来賓の参加を得て、本研修の成果を幅広く関係者に知っていただくことができた。

研修生からは、アフガニスタンでは博士課程がない学問分野も数多いため教員に博士号保持者が少ない他、教育省から教員へのサポートが手薄いなどの問題も多く、高等教育分野における課題は山積しているとの声が聞かれた。しかし、本国では教え子により良い教育を

提供しようと意欲的に知識を吸収しようとする姿が見られた。本学が実施する短期研修は、アフガニスタンの女性教員に貴重な機会を提供していると言える。

7. 2 アフガニスタンへの絵本寄贈

国連アフガニスタン支援ミッション（UNAMA）の発表によれば、2016年1月～12月に紛争に関連する戦闘やテロで死傷したアフガン市民の数は、過去最高を記録した2015年を更に3%上回る11,418人（死者3,498人、負傷者7,920人）であった。この内、女性の死傷数は1,218人（死者341人、負傷者877人）、子どもの死傷数は3,512人（死者923人、負傷者2,598人）であり、犠牲者の実に約10人に1人が女性、約3人に1人が子どもであった。（出所：UNAMA, *Report on Protection of Civilians in Armed Conflict: Annual Report 2016*, February 2017, https://unama.unmissions.org/sites/default/files/protection_of_civilians_in_armed_conflict_annual_report_2016_16_feb_2017_final.pdf）

このような厳しい治安状況下で、本学がアフガニスタンの学校や子どもたちを独自に支援することは難しいため、アフガニスタンで学校図書室事業を展開している公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）に委託し、SVAの学校図書室推進事業の対象図書館や学校図書館で利用されるオリジナル絵本の作成を支援した。この支援は平成24（2012）年度から実施している。

平成28（2016）年度は、2003年にSVAが設立した絵本出版委員会の当初からのメンバーだった詩人のハビブラ・ズラ・スワンド・シンワリさん（享年82歳）が、生前に創作したオリジナル・ストーリー「幸せの半分は健康から（Health is half of wealth）」をダリ語とパシュトゥ語で各1,200冊、合計2,400冊印刷し、カブール州とナンガハル州の図書館・学校図書館に配布した。物語は、少年グルがお母さんからもらったお金で学校帰りにビワを購入し洗わずに食べてお腹を壊してしまい、民間療法に従ってよくわからない薬を飲んで治そうとするが一向に快方に向かわず、最後には意識を失い病院に搬送されて両親が医者に相談したところ胃腸を洗浄し薬を処方して快復したことで、教育と健康の重要性に気付くというお話である。



絵本「幸せの半分は健康から」を持つ子どもたち

絵本の配布先施設と児童数

配布対象施設	数	児童数
小学校（ナンガハル州、カブール市）	99	203,902 人
公共図書館（カブール市、ナンガハル州、マザリシャ リフ市、クナール州、ヘラート州）	10	500 人
ナンガハル州ジャララバード市子ども図書館	1	131 人
合計	110	204,533 人

（出所：SVA 報告）

SVA アフガニスタン事務所は、絵本が有効に活用されるよう、一般教員向け研修と図書館員育成研修を行った。一般教員向け研修とは、1 回当たり基本的に 1 校の全教員を対象（平均 31 人）とし、図書館及び図書の効果的な活用法を習得することを目的に 2 年間に 2 回実施するものである。今年度は、第一回目の研修は 8 校 243 人を対象に、第二回目の研修は 8 校 262 人を対象に実施した。図書館員育成研修とは、1 校につき図書室担当教員、校長、教頭等 4 人ずつ参加するものである。図書室の運営方法を習得することを目的とし、3 日間の研修を 2 年間で 2 回実施する。今年度は第一回目研修を 12 校の 50 人、第二回目研修は 15 校の 66 人を対象に実施した。

アフガニスタンにおける絵本の作成・配布活動を通じて、子どもの絵本へのアクセスの改善、子どもの読書に対する関心の高まりといった教育的な意義の他にも、それぞれの絵本が持つメッセージに子ども達が触れることで道徳面での学びがあり、本活動の果たす役割は大きい。



子ども図書館の様子



完成した絵本を読む子ども達

7. 3 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタンスタッフ 来訪・セミナー

(1) シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン事務所所長代行の来訪

2016年11月18日(金)、公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 (SVA) アフガニスタン事務所所長代行の が事務所長の三宅さんとともに来訪し、「アフガニスタンの子ども図書館活動と絵本事業」と題する講演会を行った。グローバル協力センターは、「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の一貫として、SVAを通じてオリジナルの絵本をアフガニスタンの小学校図書室などに寄付しており、当日は、本学で学ぶアフガニスタン人留学生3人も参加し、絵本配布事業の進捗状況や活動の意義などについて活発な意見交換が行われた。

SVAは、「学校図書室事業」「児童の図書推進事業」により、カブール州、ナンガハル州を対象州として、絵本の作成・配布、教員・司書の訓練、モバイル図書室(読み聞かせ、紙芝居等)、学校図書室の整備等の活動を実施している。2016年には、絵本を22タイトル(累計110タイトル)作成、学校図書室を15校(累計91校)設立、モバイル図書室を28校で実施という成果を上

げた。また、野々山基金からの支援で絵本1タイトル(ダリ語、パシュトゥ語各1,200部)を印刷予定であり、現在準備中とのことである。絵本活動を通じて、子どもの絵本へのアクセスの改善、子どもの読書に対する関心の高まりといった意義の他、アフガニスタンの教師の中には、長く続いた戦争の影響で過去に戦闘員だった者もあり、人を敬う、環境や平和を守る、といったことについて教えることができない者もいるが、こうした道德面での学びがあると 仰っていたのが印象的だった。

質疑応答の時間には、現地で絵本活動を実施する上での困難や今後の予定についても意見が交わされた。最初は、宗教指導者の中には絵本はイスラムの教えに反していると考えるものもいて反発があったが、SVAは聖典コーランに基づきそれは間違った理解であることを説明し、宗教指導者も次第に絵本を受け入れるようになってきたとのエピソードがあった。現在はカブール州、ナンガハル州の2

州での活動だが、今後は他州にも拡大する計画であり、防災・災害リスク削減について学べる絵本を作成する予定もあるとのことであった。

（２）アフガニスタン研修員との懇談会「アフガニスタン女性の現在と未来」

2017年1月16日から27日まで実施された「アフガニスタン・開発途上国女子教育支援事業野々山基金」の支援による短期研修の参加者である 大学講師と、

薬学部卒業の薬剤師を囲み「アフガニスタン女性の現在と未来」と題する懇談会を、学内外から十余人の参加を得て1月20日にグローバル協力センターで開催した。冒頭、駿溪トロペカイ先生（元グローバル協力センター客員研究員、NGO「希望の学校」代表）から、アフガニスタンにおける女性を取り巻く状況について、具体的な事例を交えた説明があった。その後、研修生の2人からは、 大学における教育の現状と課題や、同国の女性警察官が直面する困難についてお話があり、参加者とのオープン・ディスカッションが行われた。当日は学生、教職員の他、アフガニスタンの平和と復興に関心を持つ外部の方々の参加があった。

8. センター教員担当の全学共通科目

8. 1 全学共通科目「NPO 入門」、「NPO インターンシップ〔実習〕」

(1) 全学共通科目「NPO 入門」

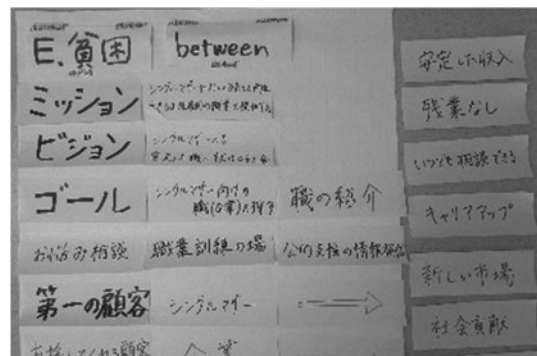
20 世紀後半から、NPO (Non-Profit Organization、民間非営利団体) や草の根組織が、コミュニケーション革命に伴って、世界を揺るがす組織変革を起こして拡大してきた。特に、冷戦の終結以降、国家、市場、市民社会は全く新しい力関係にシフトし、その中で市民社会の役割が増している。NPO は、民間でありながら公共的な課題を担う市民の自主組織であり、政府や企業だけでは解決できない社会問題、たとえば福祉、子育て、貧困対策、まちづくり、環境保護、国際協力、文化活動などに補完的に取り組んでいる。

本授業では、「NPO とは何か」を現場の活動に学びながら理解すること、NPO による社会問題解決の方法を、グループ・ワークや企画書の作成を通じて学び、自らの提案力、行動力を養うことを目的として授業を行った。本年度は 26 人の学生が受講した。授業前半では、市民社会や NPO に関する理論についての説明に加えて、NPO 活動の現場で活躍する方々をゲスト講師に呼びお話を伺う機会を 3 回設けた。また授業後半では、NPO の活動に不可欠なコミュニケーション能力を養成するため、学生による発表を含めて 4 回にわたって「NPO 事業計画書の作成」と題するグループワークに取り組んだ。

最初は NPO について漠然とした理解しかなかった学生も、授業における講義やゲスト講師からのお話を聴く中で、具体的なイメージを掴むことができたようであった。また、「NPO 事業計画書の作成」を通して、ミッション、ビジョン、ゴールなどに基づいた事業形成の考え方や、グループでコミュニケーションを図りながら考えをまとめ、それを発表することが身に付いたと考えられる。後述の「NPO インターンシップ〔実習〕」の履修をする上での義務としていたが、学生がインターンに臨むにあたって NPO の歴史的経緯や理論的枠組みを把握する役割も果たしたと思われる。



「NPO 事業計画書の作成」グループワークを終えて発表する様子



学生が模造紙に作成した NPO 事業計画書

(2) リベラルアーツ (LA) 科目生活世界の安全保障 23「NPO インターンシップ〔実習〕」

本授業は、本学において 2003 年から文理融合リベラルアーツ科目の一つとして行われている実習形式の授業である。実習生は、本授業を通じて、自らが選択した受け入れ団体となる NPO で年間最低 60 時間のインターンシップ(体験就業)を行う。本年度も、学生が NPO の活動に実際に参加し、その意義、役割、抱えている課題を実地に学ぶこと、社会活動の中で大学での学習・研究の課題を発見すること、将来にわたる社会と自分の関わりを考えるきっかけにすることの 3 点を目的に行われた。なお、本授業を履修するには、上述の講義「NPO 入門」を受講する必要がある。

本年度は、7 団体で学生 15 人(1 年生 8 人、2 年生 3 人、3 年生 3 人、4 年生 1 人)が実習を行った。受け入れ団体は、自立生活サポートセンターもやい、えこお、チャイルドライン支援センター、グランマ富士見台、シャプラニール=市民による海外協力の会、市民科学研究室、オックスファム・ジャパンの 7 団体である。各団体が取り組む分野は、貧困対策、青少年育成、子ども支援、子育て支援、国際協力、科学の普及など、多岐に渡った。

実習生による報告と職場訪問の様子から、大きく 2 つの課題が浮かびあがってきた。一つ目は、実習時間数の確保である。学生の多くは、定期の授業、課外活動、国際交流プログラム、アルバイトなど忙しく、年間最低 60 時間という基準をクリアするのに苦労していたようであった。二つ目は、主体性を持って実習に臨むことが課題となっていた。NPO の第一線の現場では、インターンがすべきことを手取り足取り教えてくれるとは限らないため、実習生の積極性と学ぶ意欲が試されるような場面も多かったと思われる。しかし、職場訪問からは実習生の着実な成長が感じられた。

今後、実習生が、NPO でのインターン経験を学業や研究において活用したり、将来の仕事を選ぶ際の材料としたり、また、どのようなライフステージにおいてであれ社会との関わりを考える際の助けとすることが期待される。



学童クラブで子どもの見守りをする実習生(中央)
(グランマ富士見台)



交流サロン「こもれびサロン」の運営を補佐する
実習生(3 人とも)(もやい)



貧困を考えるワークショップの進行役を務める実習生（起立者）（オックスファム・ジャパン）



支援者への資料発送を補佐する実習生（左）（チャイルドライン支援センター）



関係先への送り状を手書きする実習生（チャイルドライン支援センター）



市民と防災研究会の記録を取る実習生（中央）（市民科学研究室）

2017 年 1 月 28 日には、実習の集大成として最終報告会を実施した。学生を受け入れてくださった NPO 指導担当者の参加も得て、活発な意見交換が行われた。

日時： 2017 年 1 月 28 日（土）9：30～11：30

場所： お茶の水女子大学 本館 125 室

テーマ：「2016 年度 NPO インターンシップ学生実習報告会」

講師：

上田 昌文氏（特定非営利活動法人市民科学研究室代表理事）

浦辺 左由美氏（特定非営利活動法人グランマ富士見台法人理事・事務局長）

加藤 歩氏（特定非営利活動法人自立生活サポートセンターもやい事務局長）

高橋 俊行氏（特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター事務局員）

林 永健氏（特定非営利活動法人オックスファム・ジャパン・プロジェクト・オフィサー）

平岩 扶巳代氏（特定非営利活動法人えこお事務局長）

8. 2 全学共通科目「平和と共生演習」「『平和と共生』実践演習」

途上国の開発や国際協力は、多様な分野が複雑に絡み合っており、これらの分野について、理論と実際の両面から理解を深めることが重要となってくる。本科目では、途上国の開発と国際協力に関心を有する学部生、大学院生を対象として、開発の理論と国際協力プロジェクトの実際について、多様な角度から知識を得るとともに、得られた知識を生かして議論を通じて理解を深めていった。また、途上国の問題の理解には、関連する日本の問題の理解も重要であり、日本に関するトピックも取り上げた。具体的には以下のようなテーマを取り上げた。

農業：途上国の農業・農村の構造、アフリカにおける市場志向型農業開発とジェンダー

工業：東アジアとその他の地域の工業開発、中央アジア・日本等における地域産業振興とジェンダー

教育：国際的な教育開発の動向、中国の出稼ぎ労働者の子弟の教育問題、日本の数学教育の発展、インドの教育開発の課題

保健：フィリピン、シエラレオネの地域保健改善の取組（ゲスト講師：JICA 東京国際センター人間開発課 加藤恵氏）、バングラデシュ母性保護強化プロジェクトを事例とした課題の抽出・分析とそれに基づく協力内容の検討

労働移動：労働移動の理論、メコン地域における人身取引問題への ODA、NGO の取組（ゲスト講師：JICA 社会基盤・平和構築部ジェンダー平等・貧困削減推進室 田中香苗氏）、中国の農民工、日本の外国人労働者

開発に関する国際的な議論：ミレニアム開発目標（MDGs）から持続可能な開発のための 2030 アジェンダ（SDGs）へ

学生のバックグラウンドは多様であり、学生の関心を反映したトピックを含めるとともに、学生による、関心を有するトピックについての発表も行われた。留学生による自分の国の問題についての報告も行われた。

実際に国際協力プロジェクトの従事しているゲスト講師による講義も含め、現場でプロジェクトに携わった講師ならではの興味深い情報も多数提供され、生の情報に基づき国際協力を考える興味深い内容となった。

開発や国際協力の主要な分野についての知識、とりわけ「使える知識」を目指して、理論と実際に学ぶとともに、議論を通じて、多角的に見る目を養った。

8. 3 学内公開講座

センター教員担当講座にてゲスト講師による以下の学内公開講座を実施した。これらの講義は当該の科目履修者だけでなく当該のテーマに興味を持つ本学関係者（学生、職員、附属高校生）の聴講を受け入れた。

（１）「NPO 入門」「NPO インターンシップ[実習]」

日時： 2016 年 6 月 13 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「構造的貧困と NPO」

講師： 栗原 俊輔氏（宇都宮大学国際学部国際社会学科講師、元 CARE U.S.A. スリランカ事務所スタッフ）



栗原俊輔氏

日時： 2016 年 6 月 20 日（月）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「国際協力と NPO」

講師： 小美野 剛氏（特定非営利活動法人 CWS Japan 事務局長）



小美野剛氏

日時： 2016 年 6 月 27 日（月） 13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 301 室

テーマ：「行政と NPO との協働」

講師： 関口 玲美氏（外務省国際協力局民間援助連携室外務事務官）



授業の様子

（2）国際共生社会論実習

カンボジア・グループ

日時： 2016 年 6 月 14 日（火） 16：40～18：10

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 102 室

テーマ：「カンボジアの現状（政治・経済・社会）と JICA の協力の概要」

講師： 宮崎 清隆氏（国際協力機構（JICA）東南アジア・大洋州部東南アジア第二課
企画役・課長補佐

概要： カンボジアの政治・外交・社会、経済、組織、ガバナンスの現状について



講義の様子

日時： 2016 年 7 月 7 日（木） 16：40～18：10

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 102 室

テーマ：「開発途上国の母子保健が抱える課題とカンボジアとの JICA 協力」

講師： 山形 律子氏（国際協力機構（JICA）人間開発部保健第二グループ課長）

概要： JICA が世界的に行っている母子保健分野における支援の実情、戦略、課題と、カンボジアでの JICA の保健医療協力の詳細について



山形律子氏

日時： 2016 年 7 月 12 日（火）16：40～18：10

場所： お茶の水女子大学 共通講義棟 1 号館 102 室

テーマ：「AAR Japan のカンボジアでの支援活動」

講師： 大室 和也氏（認定 NPO 法人難民を助ける会東京本部カンボジア事業担当）

概要： AAR Japan とはどのような活動をしている団体なのか、そもそもなぜカンボジアでは AAR Japan による支援が必要なのか



大室和也氏

日時： 2016 年 7 月 23 日（土）13：00～15：45（ネパール・グループと合同）

場所： お茶の水女子大学 本館 124 室

テーマ：「カンボジアにおける平和構築—紛争による負の影響からの脱却—」

講師： 小向 絵理氏（JICA 国際協力専門員〔平和構築〕）

概要： JICA が行う平和構築に向けた取り組みについて、カンボジアにおける地雷の状況及び対策の現状と課題、南南協力の展望などについて



小向絵理氏

ネパール・グループ

日時： 2016年6月7日（火）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 127 室

テーマ：「ネパールの概要」

講師： 檜戸 健次郎氏（元日本キリスト教海外医療協力会ネパール派遣医師・家庭医）

概要： ネパールで檜戸先生が実施する医療・公衆衛生、奨学金支援、震災復興支援活動の様子、渡航に当たっての注意事項や学生との質疑応答など



檜戸健次郎氏

日時： 2016年6月23日（木）10：40～12：10

場所： お茶の水女子大学 文教1号館第一会議室

テーマ：「ネパールにおける学校教育」

講師： バズラチャルヤ・ディヌ氏（お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学人間発達科学専攻博士後期課程）

概要： ネパールの概況、文化についての紹介に続いて、日本と比較しながらネパールの教育について



バズラチャルヤ・ディヌ氏

日時： 2016年6月28日（火）13：20～14：50

場所： お茶の水女子大学 本館 127 室

テーマ：「ネパールと震災復興支援について」

講師： 竹内 卓朗氏（JICA 南アジア部南アジア第四課（バングラデシュ、ネパール）課長）、他

概要： 前半にネパールの基礎情報、2015年に起こった地震の被害状況について、後半は JICA が緊急支援として行っていた住宅復興計画をもとにしたロールプレイを実施。



竹内卓郎氏（右から一人目）ら

日時： 2016年7月23日（土）13：00～15：45（カンボジア・グループと合同）

場所： お茶の水女子大学 本館 124 室

テーマ：『『より良い復興』を目指す女性たち—大地震後のネパールにおけるジェンダー主流化の可視化』

講師： 田中 雅子氏（上智大学教員、ネパール地震ジェンダー配慮支援の会代表）

概要： 2015年に発生したネパール大地震の状況と復興の現状や、「より良い復興（Build back better）」概念について、ジェンダー主流化の可視化を取り入れた事業形成・運営等について。



田中雅子氏

(3) 学内公開講座「環境と成長のハーモニー」

2016年10月19日(水)、小西淳文駐ベナン特命全権大使(前お茶の水女子大学特任教授、元国際協力機構上級審議役)をお招きして、学内公開講座「環境と成長のハーモニー」を開催した。地球規模で問題となっている環境問題について、これまでの国際社会の取り組みや、最先端の科学技術に基づく日本の貢献である「地球規模課題対応国際科学技術協力(SATREPS: Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development)」を中心にお話いただいた。

小西大使は、日本が1960年代に大気汚染や水質汚濁などの公害を克服した経緯に触れ、この関連技術は開発途上国でも応用が可能であり、日本の科学技術は大きなポテンシャルを持っているとお話しされた。また、こうした地球規模での環境悪化を受けて、1972年国連人間環境会議、1992年国連環境開発会議(リオ会議)、2002年ヨハネスブルグ・サミット(リオ+10)、2012年国連持続可能な開発会議



環境問題と日本の貢献についてお話をされる小西大使

(リオ+20)などの地球環境保全に関する会議を国際社会は開催してきており、同時に、京都議定書(1997年採択、2005年発効)やパリ協定(2015年採択、2016年11月発効見込み)について議論されるなど、法的・制度的な枠組みが徐々に形作られてきた経緯について詳しく説明があった。

講義は豊富な事例を元に進められ、まず、地球温暖化に伴う環境への影響の事例として、ブータンにおける氷河湖決壊洪水のリスクについての話があった。ブータンでは過去3回の氷河湖決壊による洪水被害が発生したが、その科学的な根拠については必ずしも明らかではなかった。日本の最先端の科学技術を用いたメカニズム解析により、危険とされていた25個の氷河湖の内、危険だと評価された湖は1個だけということが判明し、結果として適切な対応策を講じることが出来たとのことであった。また、ツバルの事例では、同国が浸水

の危機に晒されている理由には、グローバルな要因（地球温暖化による海面上昇）とローカルな要因（環境負荷の増大に伴う砂の生産・運搬・堆積家庭の阻害など）の両方が存在しており、複合的な要因が影響を及ぼしているとのことがあった。この他、インドネシアの森林火災の予防事業についても言及があった。

質疑応答では、SATREPS のプロジェクトはどのようなプロセスで実現するのか、将来的に学生がこうしたプロジェクトに参加するためにはどうしたらよいか、など多数の質問が寄せられた。環境問題や日本の科学技術を用いた国際貢献について考える貴重な機会となった。



学内公開講座の様子

9. その他

9. 1 グローバル協力センター図書室利用状況

グローバル協力センター図書室は2017年1月末時点で1,240冊蔵書しており、開架図書として利用者が自由にアクセスできる状態にある。開室時間は祝祭日を除く月曜日から金曜日の10時から17時で、お茶の水女子大学学部生、大学院生、附属高校生、教職員を利用対象者としている。今年度も貸出件数として、200冊を超える貸出と閲覧利用があった（2017年2月末時点；図2）。今年度の主題別貸出内訳として330網（経済）が25%と最も多く、360網（社会）が22%、310網（政治）が10%であった（表1）。この他、学外の附属図書館利用者カードのある利用希望者については附属図書館の職員が事前に借り出し、附属図書館内で閲覧・複写利用を認めており、今年度はこれまで2件の利用があった。

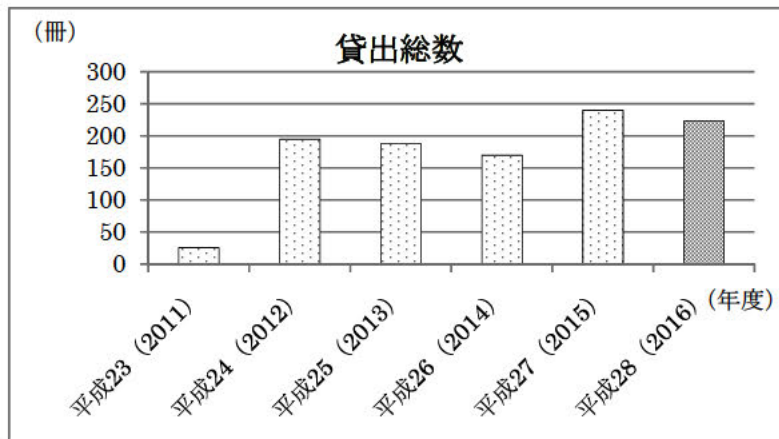


図2 平成23（2011）年度～平成28（2016）年度（2月末まで）貸出状況

表1 平成28（2016）年度（2月末まで）貸出内訳

	0 類	1 類	2 類	300	310	320	330	340	350	360	370	380	390	4 類	5 類	6 類	7 類	8 類	9 類	そ の 他	合 計
文	-	-	7	13	14	-	40	-	1	14	7	-	-	1	4	14	-	4	5	2	126
理	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0
生	-	-	-	-	-	1	2	-	-	1	3	-	-	-	-	1	-	-	-	-	8
留	-	2	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4
院	1	1	-	1	5	-	13	-	-	26	8	-	5	-	-	1	-	2	-	2	65
教	-	-	-	-	3	3	-	-	-	7※	-	-	3	-	2	-	-	1	1	-	20
合 計	1	3	7	14	22	4	55	0	1	49	19	0	8	1	6	16	0	7	6	4	223

※内2冊は文京区民への貸出

蔵書の構成としては、グローバル協力センターの教育・研究活動に資する資料を中心に収集されており、平和構築、開発、国際協力、ジェンダー等のテーマの書籍が充実している（表2）。

表2 2017年1月末時点での分類別蔵書数

NDC（日本十進分類法）		和書	洋書	視聴覚	合計	構成比
0（総記）		7	2	2	11	0.9%
1（哲学）		12	1	0	13	1.0%
2（歴史）		51	4	0	55	4.4%
3（社会科学）	300（社会科学）	69	2	0	71	5.7%
	310（政治）	132	62	0	194	15.6%
	320（法律）	53	20	0	73	5.9%
	330（経済）	321	27	1	349	28.1%
	340（財政）	1	1	0	2	0.2%
	350（統計）	2	0	0	2	0.2%
	360（社会）	161	26	5	192	15.5%
	370（教育）	75	11	0	86	6.9%
	380（風俗習慣・民族学・民俗学）	14	3	0	17	1.4%
	390（国防・軍事）	6	1	0	7	0.5%
4（自然科学）		46	13	0	59	4.8%
5（技術・工学・工業）		30	2	2	34	2.7%
6（産業）		46	0	3	49	4.0%
7（芸術・美術）		0	0	2	2	0.2%
8（言語）		9	1	0	10	0.8%
9（文学）		14	0	0	14	1.1%
合計		1049	176	15	1240	100.0%

9. 2 情報発信

(1) ホームページによる情報発信

グローバル協力センターのホームページは、センターが主催・協力する各種イベント（公開講座、講演会、大学間連携イベント、履修説明会など）の学内外への通知・案内と活動報告を中心に年間約 40 件の情報を掲載している。各種イベントの報告は「共に生きる」スタディグループ・メンバーをはじめとするイベント参加学生が執筆した。

活動報告のうち 12 件は英訳して英語版ホームページに掲載し、対外（国内及び国外）的な情報発信に努めた。

また、印刷・製本した報告書はすべて電子化（PDF 化）して、センターホームページの「刊行物」コーナーから閲覧できるようにした。

今年度は、大学ホームページをリニューアルし、サーバ及びコンテンツ管理システム（CMS）が変更となった。これにより、各部署単位で個別にホームページの運用管理を行う必要がなくなり、全学的にデザインが統一された。また、ウェブアクセシビリティの向上、アクセス管理が可能になるなど、機能面が向上した。ただし、全学的にサイト移行が完了していないため、旧サイトのデザインが混在したり、英語ページに日本語が混在したりするなど未対応の箇所が残っている。

(2) メーリングリストによる情報発信

平成 28 (2016) 年度の「共に生きる」メーリングリストへの登録者は約 150 人（2017 年 1 月現在）となり、年間約 80 件以上の学内外（国連、JICA、NGO 等）のイベント情報（国際シンポジウム、セミナー、インターン募集等）や「共に生きる」スタディグループの活動情報を発信し、学内外の公開講座やイベントへの関心を高めるきっかけを作った。

(3) 大学メールマガジン、公式 SNS、学生ポータルサイトによる情報発信

上記以外の広報手段として、学内者に向けてイベント情報を発信する場合は大学メールマガジン（OchaMail）や学内電子掲示板（DigitalSignage）、学生ポータルサイト、Twitter を利用し、一般向けに広く発信する場合は大学ホームページや Facebook を利用するなど、よりタイムリーに、より広範囲にセンターの活動や取り組みを情報発信することに努めた。

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—
平成 28（2016）年度 実施報告書

2017 年 3 月
お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1
Tel&Fax : 03-5978-5546
Email : info-cwed@cc.ocha.ac.jp

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成
—女性の役割を見据えた知の国際連携—

平成28(2016)年度 実施報告書



お茶の水女子大学